

平成28年度

実践の記録

いなよう

第30集

主体的に活動する力を育む授業実践

～児童生徒の気付きや実感に基づいた学習評価を通して～

秋田県立稲川支援学校

目 次

はじめに

校長 小林 吉則

第 1 部 研究概要

平成 28 年度の研究について 1

1 研究計画

2 研究の実際とまとめ

【資料】稲川支援学校キャリア教育の指標「地域とあゆむ いーなプラン」

第 2 部 各学部の実践

I 小学部について 10

1 研究テーマ

2 テーマ設定の理由

3 研究仮説

4 研究の内容・方法

5 研究計画

6 研究の実際

7 成果と課題

II 中学部について 26

1 研究テーマ

2 テーマ設定の理由

3 研究仮説

4 研究の内容・方法

5 研究計画

6 研究の実際

7 成果と課題

III 高等部について 41

1 研究テーマ

2 テーマ設定の理由

3 研究仮説

4 研究の内容・方法

5 研究計画

6 研究の実際

7 成果と課題

IV 訪問教育について 54

○実践報告

第 3 部 研修の記録 58

いなよう研修会

あとがき

教頭 高橋 貢

はじめに

校 長 小 林 吉 則

「先生達はまるでブッシのようですね。」年度途中の研究会で私がいった感想です。

はじめて、この冊子の表紙の『実践の記録 いなよう』という文言を見た人は、何の実践か疑問に思うでしょう。これは今年度本校が取り組んだ教育活動改善の実践記録です。

今年度の取組が過去の実践とどのようにつながっているのか、研究テーマで確認することができます。

平成25～26年度 「働く力を育む教育課程の編成」

～地域社会と連携したキャリア教育の検討と実践～

平成27年度 「集団の中で一人一人のキャリア教育を支援する授業実践」

～学ぶ環境づくりの工夫を通して～

そして今年度は 「主体的に活動する力を育む授業実践」

～児童生徒の気付きや実感に基づいた学習評価を通して～

前年度までは本校の教育活動の枠組みづくり、今年度からはその中身の充実となっています。

ではどのように進めてきたのかというと、次のようになります。

- ① 全体で研究テーマを決め、改善の方向性を共有する。
- ② 小学部、中学部、高等部ごとに具体的な改善の方法を決めて、実際に取り組む。
- ③ 全体で進捗状況の確認、修正をしながら、成果と課題をまとめる。

単純そうですが、年間計画を見るとかなり緻密に進められているのがわかることと思います。また、外部の方において研修会を開催したり、アドバイスを頂いたりもしております。ご協力いただいた方達にこの場を借りて感謝申し上げます。

さて、今年度の取組のキーワードは“学習評価”です。日々の学校教育では、児童生徒の主体的な活動を教師の働きかけで引き出すことが大切です。操り人形のように教師の指示で子供たちを動かすことではありません。そのためには、児童生徒と教師が、「できたね」「どうすればもっとうまくできるかな」と、同じ目線で考え、同じ感覚で成果を感じ取っていくことが必要です。学習評価の共有です。ところが、夢中になって子供たちと向き合っていると自分の授業がどうなっているか客観的にみることができなくなってきました。今年度は、これをしっかりと確認できるような仕組みを考えました。

小学部は「遊びの指導」を題材に取組を進めました。研究会で「遊び方の強制になるのでは」という質問がありました。その回答は、『特定の遊びの繰り返しは児童に安心感を与え自由な発想の素地ができ、その後の遊具等のマイナーチェンジが児童の主体性を引き出す』でした。私はこれを聞いたとき、年上の子ども達の遊びをまねしながら、やがて自分の遊びを作り出していった子どもの頃を思い出し、「生きる力」とのつながりを感じました。

優れた仏師（ブッシ）は、木の中に眠っている仏像を彫りだしているのだそうです。今年度、日々の教育活動の中で、子供たちの中に眠っていた新しい姿が引き出される場面を多く見る機会がありました。

平成29年3月

第 1 部 研究概要

平成 2 8 年度の研究について

- 1 研究計画
- 2 研究の実際とまとめ

〈資料〉

- ・ 稲川支援学校キャリア教育の指標
「地域とあゆむ いーなプラン」

平成 28 年度の研究について

1 研究計画

(1) 研究主題

主体的に活動する力を育む授業実践
～児童生徒の気付きや実感に基づいた学習評価を通して～（1 年／2 年次計画）

(2) 研究主題の設定理由

①昨年度の研究から

昨年度は「集団の中で一人一人のキャリア発達を支援する授業実践～学ぶ環境づくりの工夫を通して～」という研究主題のもとに実践を行ってきた。児童生徒が学び合う環境づくりを行い授業を展開したことで、活動の仕方が分かる力や自分の役割を果たす力、関わって活動する力、友達や相手を意識する力を身に付けることにつながり、集団としての育ちにもつながった。環境づくりの検討は、集団の中で一人一人が自分の役割を果たし関わって活動することにつながり、キャリア発達を支援するうえで一定の効果が得られ、有効であることが分かった。

一方で、環境づくりを中心に進めた結果、児童生徒の選択場面や思考・判断場面が不足したという面が見られた。児童生徒が自分でやりたい活動を選んだり、関わりたい友達を選んで活動したりするなどの活動が少なかったといえる。また、児童生徒が学校や地域で主体的に活動する中で、感じ、学び、考えたことを教師が的確に把握することが必要であるが、学習場面や評価場面での児童生徒の気付きや実感と、教師の気付きや実感との間に違いやズレが感じられたという反省が各学部から出された。

児童生徒の育ち等を評価する具体的な基準を設定し、教師間で指導方法や手立てを共通理解することや、児童生徒に活動の目標等を分かりやすく提示することで児童生徒と教師との間で課題等を共通理解することの必要性が出された。

②社会的要請から

○学習評価について

授業や単元の指導に当たっては目標の実現を目指す指導の在り方が求められている。指導と評価の一体化を図ることが大切であり、学習評価を学習指導の改善に生かす必要がある。＜中央教育審議会：児童生徒の学習評価の在り方について 2010 年＞

○主体的な力と学習評価について

これからの変化の激しい時代に対応していくには、「何を教えるのか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが必要であり、課題の発見や解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブラーニング」）や、そのための指導の方法を充実させていく必要がある。学びの成果として「どのような力が身に付いたか」に関する学習評価の在り方についても改善を図る必要がある。＜中央教育審議会：初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）2014 年＞

③「主体的に活動する力」について

本研究では、「主体的に活動する力」を、本校キャリア教育の指標「地域とあゆむい～なプラン」の 4 つの付けたい力、「生活する力」「人と関わる力」「考える力」「意欲をもって物事に向かう力」ととらえて取り組んでいく。

④「気付きや実感に基づいた学習評価」について

学習目標の設定と学習評価を通して、児童生徒が以下のような気付きや実感を味わうことができるような授業実践を行っていく。

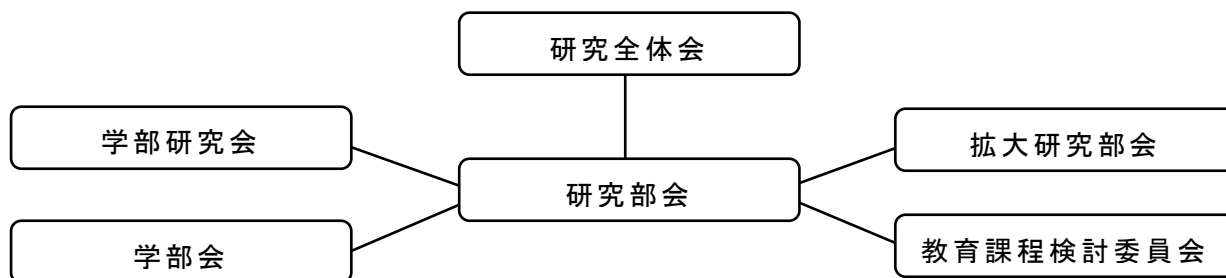
- ・児童生徒の気付きや実感…「分かる」「できる」「楽しい」「好き」「安心する」「認められてうれしい」「こうすればできる」「こうすればみんなが喜ぶ」など。
- ・教師の気付きや実感…「こうすれば分かる」「この条件ならできる」「この表情なら楽しそうだ」「こうすれば一緒に活動できる」など。

これらのことから、本校の教育目標、昨年度の課題と成果、今年度の実態、社会的要請等を受けて本研究主題を設定した。

(3) 研究仮説

一人一人の気付きや実感を伴う学習評価（学習状況の評価、指導の評価）を基に授業実践を進めていくことで、児童生徒は学習への関心や意欲が高まり、主体的に活動する力が付く。

(4) 研究組織



※拡大研究部会：校長、教頭、学部主事、進路指導主事、研究部員

※教育課程検討委員会：教頭、学部主事、（必要に応じて参加：訪問教育担当、進路指導主事、研究主任）

(5) 研究の内容と方法

①評価システムの構築と活用

- ・学部の実情等に応じた評価システムの構築とその活用方法について探る。

②学習評価（学習状況の評価、指導の評価）を通しての授業実践

ア 学習状況の評価

○観点別学習状況の評価に基づく評価規準と評価基準の設定と評価

- ・単元の評価規準を基にしながら、児童生徒個々の評価基準を設定し評価を行う。

○個人内評価

- ・授業の目標以外の児童生徒の様子の評価、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価を行う。

イ 指導の評価

- ・学部毎に構築した評価システムを活用し、行動観察、エピソード記録などの様々な方法で評価を行い、授業改善に取り組む。

(6) 研究計画

【1年次】

①児童生徒の実態と照らし合わせて、評価の共有をはかりたい指導の形態等を選択して研究する。

②学部ごとの評価システムを構築し、学習評価を通しての授業実践を行う。

【2年次】

指導の形態や評価システムの在り方についての検討を通して授業実践を行い、1年次で明らかになった課題を改善する。

(7) 年間計画

期 日	全校に関わる研究会、研修等	備 考
4月11日(月)	拡大研究部会①	今年度の方向性について
26日(火)	研究全体会①	〃
5月6日(金)	研修会	
6月2日(木)	学部研①	
7月1日(金)	学部研②	
8月24日(水)	校内研修会 「評価システムの活用と授業改善について」	秋田県教育庁特別支援教育課 指導主事 北島英樹 氏
9月2日(金)	学部研③	
21日(水)	全校授業研究会①(高等部) 指導助言者：横手支援学校 教諭(兼)教育専門監 佐々木義範 氏	生活単元学習(進路)
10月4日(火)	学部研④	
11月1日(火)	学部研⑤	
4日(金)	全校授業研究会②(小学部) 指導助言者：秋田県教育庁特別支援教育課 指導主事 北島英樹 氏	遊びの指導(学部合同)
25日(金)	全校授業研究会③(中学部) 指導助言者：横手支援学校 教諭(兼)教育専門監 佐々木義範 氏	作業学習(陶芸班)
12月1日(木)	学部研⑥	
7日(水)	拡大研究部会②	全校研後の授業改善にむけた 取組について
20日(火)	研究全体会②	〃
1月23日(月)	学部研⑦	
2月2日(木)	学部研⑧	
15日(水)	拡大研究部会③	次年度に向けて
21日(火)	研究全体会③	〃
3月8日(水)	学部研⑨	

2 研究の実際とまとめ

(1) 研究の内容

(※ 学部の実践の詳細については、各学部の研究 P10～P53 を参照)

①評価システムの構築と活用

・小学部では遊びの指導(学部合同)、中学部では作業学習、高等部では生活単元

学習（進路）を取り上げ、各学部の実情や指導の形態に応じた評価システムの構築と活用を行った。

- ・小学部、中学部では、授業の評価と改善に向けて、授業後に毎回学部職員全員でVTRを用いたカンファレンスを実施した。高等部では、教師間で情報を共有するツールとして「はたらくノート」を、教師・生徒・保護者間で情報を共有するためのツールとして「振り返りカード」を用いた授業作りと学習評価に取り組んだ。

②学習評価を通しての授業実践

ア 学習状況の評価

観点別学習状況の評価の4観点「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」に基づき単元ごとに評価基準を設定した。

評価基準をベクトルの方向、評価基準をベクトルの長さとして考え、評価基準や評価基準の設定を通して、「期待する姿」に向けて児童生徒と教師のベクトルを合わせるようにした。（図1）



図1 評価基準と評価基準の設定、評価についての考え方

○単元の評価基準の設定（P20、P39、P52 参照）

- ・単元設定時に、一つ一つの学習活動に合わせて、児童生徒がどのような学習状況として実現すればよいのかについて具体的に想定し、観点ごとに「おおむね満足できる」状況を示した。
- ・単元全体の中では4観点の全てが盛り込まれているように、単元設定時に、偏りのないバランスのとれた学習活動を考えていくようにした。

○児童生徒個々の評価基準の設定（図2）

- ・単元設定時に、単元の評価基準を基にしながら、児童生徒個々の評価基準を設定した。
- ・個々の評価基準に基づいた評価を行うとともに、児童生徒が「気付いた」「実感した」ときの様子や、できた・成功した（できなかった）場合の具体的な条件や手立ては何か、などについても評価を行った。

小学部 3年 氏名 ○○						
指導の形態 「遊びの指導」		題材名 「い〜なワールドへ行こう①〜大型遊具で遊ぼう」				
題材の目標						
・トランポリンやエアートランポリン、滑り台、ボールプールなどの中から好きな遊びを選び、存分に体を動かして遊ぶ。 ・教師や友達の様子を見てまねたり、誘い掛けを受け入れたりしながら、自分から遊ぶ。 ・順番や簡単な約束を守り、他学年の友達や教師と場を共有して遊ぶ。						
児童の年間目標(遊びの指導)						
・友達や教師と一緒に簡単なルールのある遊びに進んで取り組み、経験を重ねてルールを理解する。 ・時間いっぱい集中して素材遊びに取り組む。						
評価基準	評価・エピソードなど	関	思	技	知	態度
・教師と一緒に自分の好きな遊びを選んで遊ぶ。	・教師が「どれにする？」と言葉を掛けると、自分でボールプール、トランポリン、すべり台を選んで遊んだ。 （6月17日） ・大人と関わって遊びたい様子。自分で選んで遊ぶのはバスのみ。バスで降りた先で少し遊ぶ様子が見られる。 （6月24日） ・バスから滑り台では自分から降りた。トランポリン、ボールプールは友達や先生と一緒に遊びたいと降りた。エアポリンは、「怖い」と言っていた。以前は「いやだ」と言っていたが、「怖い」と伝えてくれた。 （7月12日）	○	○	○	○	観察ビデオ

図2 児童生徒個々の評価基準

○個人内評価（小学部 P21、中学部 P30～33、高等部 P47、P49 参照）

- ・小・中学部はカンファレンスで、高等部は「はたらくノート」「振り返りカード」を用いて、授業の目標以外の児童生徒の様子の評価、児童生徒一人一人のよい点や可能性、進歩の状況について評価を行い、指導の記録等に残した。

イ 指導の評価（小学部 P14、P15、P22、中学部 P30～33、高等部 P47～49 参照）

- ・児童生徒が学習目標（どんなことを、どれくらいできたらよいのか）を把握して活動に取り組むための手立てやアプローチは適切であったか、目標を達成するための手立ては適切であったかについて、行動観察、エピソード記録などの様々な方法で評価を行い、授業改善に生かした。
- ・児童生徒個々の実態や各学部の学習活動の実情等に応じて、気付きや実感の表現、自己評価、相互評価、作業日誌など、児童生徒が「気付きや実感」を発信するための方法について探った。また、行動観察、エピソード記録など、教師が児童生徒の「気付きや実感」を受信するための方法について探った（図 3）。



図 3 児童生徒と教師の気付きや実感の発信と受信

（2）今年度の成果と課題、次年度に向けての方向性

①今年度の成果

ア 評価システムの構築と活用について

- 小学部、中学部では、学部職員全員で V T R を用いたカンファレンスを定期的に行ったことで、指導に関する共通理解が図られるとともに、授業を重ねるごとに具体的な改善案が多く出され、授業改善につながった。
- 高等部では、「はたらくノート」「振り返りカード」を用いた授業作りと学習評価に取り組んだことで、生徒に関わる人たちを「つなぐ」ことができ、指導に関する方向性をその都度丁寧に確認しながら進めることができた。

イ 単元の評価規準の設定について

- 観点別学習状況の評価の 4 観点に基づき評価規準を設定することで、活動の偏りや足りない部分に気付くことができ、はっきりとしたねらいをもって指導にあたることができた。
- 単元設定時に、活動内容をねらいとの関係の中で具体的に考えることができた。中学部の作業学習では、作業工程の一つずつについて、細かく分析をすること

ができた。

ウ 児童生徒個々の評価基準の設定について

- 評価基準を明確にすることで、児童生徒は「どのような活動をどれくらいできたらいのか」を学習の中で意識しながら取り組めるようになり、学習効果が上がった。教師は、ポイントを絞ったより具体的で効果的な指導をすることができた。

②今年度の課題と次年度に向けての方向性

ア 単元の評価規準の様式と活用法について

- 評価規準の設定に多くの時間を要した。
 - 単元初めに設定したあと、十分に活用することができなかった。
- 年間指導計画を活用して評価規準を設定し、単元ごとに評価する。

イ 児童生徒個々の評価基準の設定について

- 授業での個々の目標の設定と評価は十分に行うことができたが、中・長期的な目標の設定と評価については不十分であった。
- 単元終了時に児童生徒の成長（この単元をやったことでどのように成長したのか、変わったのか）を評価できるように、年間目標や前期（後期）目標を見据えたうえでの短期的な目標の設定を行っていく。目標の整合性をはかる。
- 個々の単元目標は、評価可能な具体的な目標（量的な目標など）を設定しようとする一方で、短期的、部分的な行動目標になってしまい、本時の目標や前期目標等と同様になってしまう傾向にあった（個別の指導計画の前期目標、後期目標も同様の傾向にあった）。
- 個々の単元目標を「単元での期待する姿」に変え、学習することで「こうなりたい」という願いや期待する児童生徒の姿を描きながら設定する。

ウ 単元計画の設定について

- 日々の授業については、授業の評価と改善を重点的に実践できたが、年間目標、単元目標の設定や評価については不十分であった。
- 指導の評価をできるように、年間指導計画を見直す。また、単元ごとに計画や評価を行えるように、学部ごとに評価システムを設定する。

③次年度に向けて

「中・長期的な目標の設定と評価」について重点的に実践を行う

- #### ア 個々の目標設定と評価…個別の指導計画（年間目標、前期（後期）目標）と、単元目標、本時の目標などの目標の整合性を図り、単元毎に評価する。

- #### イ 教科等の目標設定と評価…年間指導計画の内容の見直しを図り、年間指導計画を活用して、単元毎に評価する。

④次年度の研究主題について

- ・次年度も今年度と同じ研究主題と副題で実践する。

第 2 部 各学部の実践

I 小 学 部

II 中 学 部

III 高 等 部

IV 訪 問 教 育

I 小学部

主体的な関わりを広げる遊びの指導の授業実践

～人や物を結び、子ども同士の関わる力の向上を
目指した評価システムの構築を通して～

I 小学部について

1 小学部の研究テーマ

**主体的な関わりを広げる遊びの指導の授業実践
～人や物を結び、子ども同士の関わる力の向上を目指した評価システムの構築を通して～**

- 主体的な関わりを広げる : 教師や友達を自分から誘ったり、誘いたい友達を自分で決めたりする。また、誘い方を工夫したり、誘われたことに気づき、誘いに応じたりする。
- 人や物を結ぶ : 【人一人】関わろうとする発信力と、友達を受け入れようとする受信力のそれぞれを高め、子ども同士の関わりを手助けする。
【人一物】やりたい遊びを選ぶ際の手助けをする。
- 子ども同士の関わる力の向上 : 友達に自分から発信（伝える・誘う）したり、友達からの発信を受信（誘いを受けた際に応じる）したりする力を向上させる。

2 テーマ設定の理由

（１）児童の実態

小学部は、１年生３名、２年生３名（内１名は訪問教育対象者）、３年生６名、４年生２名、５・６年生３名の学級で構成されている。コミュニケーションに関しては、発声や表情で自分の気持ちを表現する児童や、簡単な単語や指差しなど意思や要求を伝えたり、言葉のやり取りを楽しんだりする児童もいる。表現の方法はさまざまであるが、友達や教師との関わりを楽しむようになり、友達の様子を見て真似したり、自分なりの方法で誘いの言葉を掛けたりすることも増えてきている。しかし、関わりの多い学級や小集団での学習では安心感をもって活動に取り組むことが多いが、他学年や大きな集団の中では自分の気持ちを相手に伝えたり、友達からの誘い掛けを受け入れたりすることが難しく、どのように関わってよいか迷っている場面も多い。

（２）小学部における合同遊びについて

昨年度の研究から、決められたペアであれば、友達からの誘いを受けられるようになったり、経験のある活動内容であれば安心感をもち友達同士の関わりを楽しんだりすることができた、という成果が挙げられた。しかし、児童同士の日常的な関わりに発展できる活動内容でなかったために、休み時間にも遊ぶというところまで広がらなかったり、自分からやりたいゲームや遊びたい友達を選べなかったりなどの課題も出された。

今年度の小学部の児童は、上記の実態の他、遊びの指導の場面などにおいて、繰り返し行うことで遊びのやり方やルールが分かる、遊びたい気持ちが強く、夢中になって遊ぶことができるといった実態もある。発信力に関しては、友達に興味、関心はあるが表現の仕方や伝え方、相手を意識した誘い方などの関わり方が分からないといった発信する力が不足している児童が多い。また、受信力に関しては、発達段階としてまだ一人での遊びに集中していて誘いに応じることが難しい児童もいるが、誘われていても受け入れ方が分からず戸惑う児童もあり、友達からの発信を受信する力が弱く関われないという場面もある。合わせて、複数の遊びの中から自己選択して遊ぶ経験が少ないという課題もある。

そこで、今年度から小学部では週に１回、１年生から６年生までの合同遊びを設定した。集団での遊びを通して、自分のやりたい遊びを選択して夢中になって遊ぶ中で、友達や教師を遊びに誘ったり、誘いを受け入れたりする姿を引き出したいと考えた。

(3) 合同の遊びの指導と小学部の評価システムについて

児童がどのように遊びを選択し、遊び方を工夫しているかといった遊び方を探り、友達や教師との関わりをどのように広げていくかを検討するため、合同遊びの後に話し合いの機会を設定し評価する。児童がどのような遊び方をし、受信(教師や友達からの誘いを受け入れる、教師からの支援を受け止めるなど)・発信(誘いなどに気付く、それに対して表現するなど)しているかを、授業実践中の行動観察やVTRにより振り返る。そして、「こうすれば夢中で遊ぶことができる、関わって遊ぶことができる、関わりを受け入れられる」などといった児童の発信を教師がよりよく受け止め、共通理解を図りながら、次時に向けて教師からの発信(支援)につなげていく。また、話し合いにおいては、環境の設定や支援の方法の検討及び改善だけでなく、目標の妥当性に関して適宜検証していくことで、児童の人や物に関わる力の向上を目指す評価システムを構築していく。

3 研究仮説

小学部合同の遊びの指導において、評価システムを通して、遊び方や関わり方の観点で評価・改善し検討していくことにより、児童が遊びを自己選択したり、友達同士で関わる際に、発信したり受信したりする力が向上する。

※発信＝自分の思いや気持ちを伝える・表現する

受信＝友達からの関わりを受け入れる

4 研究の内容・方法

(1) 目指す子どもの姿の検討及び共通理解 (A:実態把握)

- ・昨年度の研究の成果と課題及び今年度の児童の実態から「今年度の目指す子どもの姿」を検討する。

(2) 遊びの指導の年間目標の確認及び共通理解 (A:実態把握)

- ・個別の指導計画における遊びの指導の年間目標を共通理解し、「遊びの選択」「関わり」に関する部分を確認する。

(3) 題材の概要の設定 (P:計画)

- ・題材の設定、目標、指導計画の立案、検討、共通理解を行う。

(4) 小学部の評価システムによる評価・改善

小学部の評価システム

①題材の評価規準の設定 (P:計画)

- ・観点別評価規準(「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」)を学習指導要領をもとに作成する。

②児童個々の評価基準(題材設定時)(P:計画)

- ・「題材の評価規準」を元に個々の評価基準を設定する。

③授業実践 (D:実践、C・A:評価・改善)

- ア 本時の目標の決定
- イ 活動内容の設定
- ウ 授業実践

エ 本時の評価

○授業後、付箋を使ったエピソード記録をとり、反省・評価及び改善、次時の確認をする。

○エピソード記録の整理をする。

・「児童個々の評価基準表（題材設定時）」に付箋を貼りためていく。

④児童個々の評価基準（題材設定時）の評価を記入（C・A：評価・改善）

・題材の終わりにまとめておいたエピソード記録を見返し、「4つの観点が満たされているか」「目標は妥当だったか」を振り返り評価するとともに、次の題材の目標設定に生かす。

5 年間計画

期 日	研究会等	内 容 等
5月27日（金）	学部研究会①	昨年度の成果と課題の確認 今年度の目指す姿や学部研究の方向性について
6月 2日（木）	学部研究会②	小学部の評価システムについて 個別の指導計画における「遊びの指導」の年間目標の共通理解等
7月15日（金）	学部研究会③	合同遊びにおけるエピソード記録記入 学部研究の進め方や評価システムの確認等
9月中（随時）	合同遊びについての話し合い	題材及び遊びのコーナーの検討等
9月 2日（金）	学部研究会④	合同遊びの評価及び研究の今後について
27日（火）	学部授業研究会（事前研）	事前授業協議及びVTR検証等
10月11日（火）	学部研究会⑤	提示授業における目標と支援についての検討等
12日（水）	学部研究会⑥	指導案検討等
11月 4日（金）	全校授業研究会（小学部）	
12月 1日（木）	学部研究会⑦	全校授業研究会を受けての授業改善について 評価基準やエピソード記録の確認・検討等
冬季休業中		研究のまとめに向けて
1月23日（月）	学部研究会⑧	今年度の研究の成果と課題のまとめ等
2月 2日（木）	学部研究会⑨	次年度に向けての方向性について
3月 8日（水）	学部研究会⑩	今年度のまとめと次年度に向けての確認等
* 合同遊びを行った金曜日		VTRや付箋を活用した遊びの評価等

6 研究の実際

（1）学部研究の内容

①目指す児童の姿の確認及び共通理解（a：実態把握）

・小学部における集団像と今年度の目指す児童の姿を共通理解し、評価基準の設定や授業実践時の支援などに生かした。

◇小学部としての集団像：

友達を誘ったり、誘いを受け入れたりしながら、たくさん体を動かし夢中になって遊ぶ子どもたち

◇今年度の目指す児童の姿：

自分からやりたい遊びを選び、遊びに友達や教師を誘ったり、誘いに応じたりする姿

②遊びの指導の年間目標の確認及び共通理解（a：実態把握）

・個別の指導計画における遊びの指導の年間目標（下表抜粋）から一人一人の目指す姿を具体的にイメージするとともに共通ワードから全体の方向性を再確認した。

名前	「遊びの指導」年間目標
A	・ 道具や素材を選び時間いっぱい制作したり、作った物で遊んだりする。 ・ 順番を守って遊んだり、教師を介して友達と関わって遊んだりする。 ・ 遊んだ後に、教師と一緒に簡単な片付けをする。
C	・ 教師を介して、友達と仲良く遊んだり、遊具を共有したりする。 ・ 遊びたい物や使いたい道具を選び、積極的に体をたくさん動かしたり、素材に親しんだりして遊ぶ。 ・ 遊んだ後に、教師の支援を受けながら片付けをする。
E	・ 友達の言葉掛けを聞いたり、友達の様子を見たりしながら、教師と一緒に身体を動かして楽しむ。 ・ 教師の誘いを受け入れ、一緒にいろいろな素材に触れたり、いろいろな手の動きを体験したりする。
J	・ 友達や教師と一緒に簡単なルールのある遊びに進んで取り組み、経験を重ねてルールを理解する。 ・ 時間いっぱい集中して素材遊びに取り組む。
N	・ 友達に遊び方を教えたり、自分から友達に関わったりして、簡単なルールや役割のある遊びをする。

共通ワード：・ 教師や友達をまねたり、誘ったりして遊ぶ。
・ 友達の誘いを受け入れる。（誘いに応じる）
・ 友達と一緒にきまりを守り、簡単なルールのある遊びをする。

③小学部の評価システムによる評価・改善

ア 題材の評価規準の設定（P：計画）

・ 観点別評価規準を学習指導要領（各教科、自立活動）をもとに作成した。
【P20 資料1】

イ 児童個々の評価基準（題材設定時）の設定（P：計画）

・ 「題材の評価規準」をもとに個々の評価基準を設定した。【P21 資料2】

ウ 授業実践

- 本時の目標の決定（P：計画）
- 活動内容の設定（P：計画）
- 授業実践（D：実践）
 - ・ 児童の気付き等を把握（a：実態把握）
- 本時の評価・改善（C・A：評価・改善）



授業後、反省・評価及び改善、次時の確認

付箋を使ったエピソード記録

・ 観察及びVTRから、付箋にエピソード記録をとり教師間で共有する。

記入する観点：遊び方「こんな風に遊んでいた」

「こんな手立てを講じたことで遊びを選択することができた」

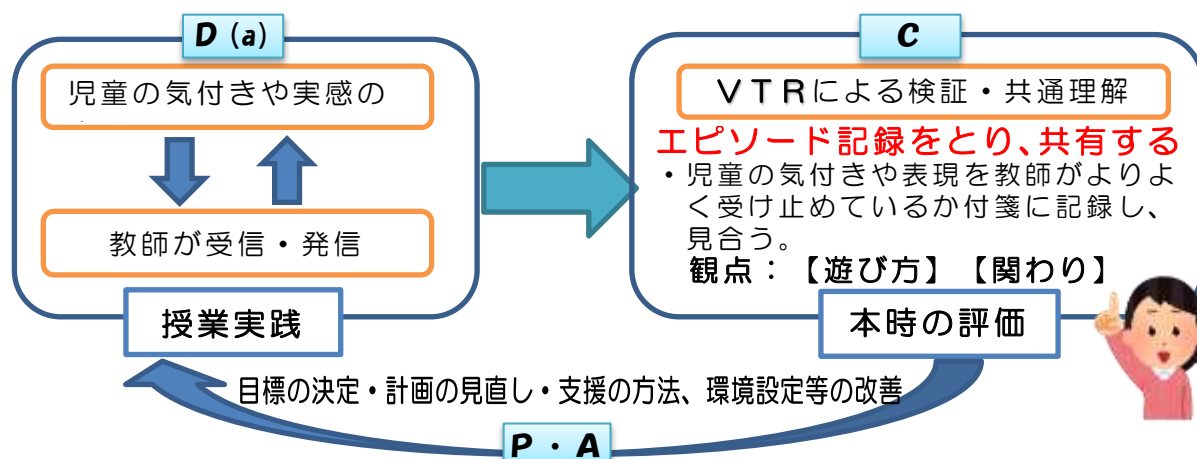
関わり「〇〇さんにこんな関わりをしていた」

「こうすると関わりを受け入れられた」など

・ 抽出児童（グループ）を取り上げ、目標の妥当性や評価、支援の方法などの確認や改善策を話し合った。

・ VTRを見ながら、遊具の活用方法や改善策、各遊びのコーナーの配置などの環境設定についての話し合いを行い、評価・改善したことを共通理解し、次時の確認をした。

・ 「児童個々の評価基準表（題材設定時）」に付箋を貼って整理した。



エ 児童個々の評価基準（題材設定時）の評価を記入（C・A：評価・改善）

（２）授業実践（第２回全校授業研究会より） 【P 1 6 指導案参照】

○全校授業研究会後の改善点及び児童の変容 【P 2 2 参照】

○VTRによる検証後の改善例及びエピソード記録による児童の変容例

（◎：改善点 ☆：児童の変容）

～環境の設定～	
◆一つのコーナーで遊んでいることが多く、次のコーナーに進んでいくことが少ない。子どもの動きが流れるコーナー設定をしてはどうか。（「ビリビリ滝」に移動してくることが少ない。）	 ◎「ポンポン山」と「ビリビリ滝」にトンネルを追加し、遊びの流れを作った。 ☆「いーな山」や「りんご」で遊んだ後にトンネルを通して「ビリビリ滝」に向かう児童が増え、遊びの幅が広がった。
～教材の工夫～	
◆「ビリビリ滝」とつながるように「テント」にある新聞紙をもっと活用してはどうか。	◎新聞紙で魚やエビ、カニなどを作り、ビリビリ滝に入れたり、焼き場を想定して薪に見立てた新聞紙を用意したりした。 ☆「ビリビリ滝」に隠された魚やカニなどを見付けると友達や教師に見せたり、食べる真似をしたりして遊ぶようになった。 
◆「空の国」をイメージしやすくするための教材を増やしてはどうか。	◎送風機を使って、「ゴーゴー風」を追加した。 ☆風船やパラシュートなどを飛ばして遊ぶのはもちろん、「ゴーゴー風」に集まるようになり、風船を集めてきたり、順番に遊んだりするようになった。 

～支援の工夫～	
◆各コーナーにおいて、遊び方が分からない児童が多いのではないかな。	◎もっとダイナミックに遊び方を演示して見せたり、見守るよりも積極的にやり方を示したりなどする。 ☆遊び方が分かり、教師の真似をするだけでなく、自分で遊び方を考えたり、工夫したりするようになった。

- ・このように環境や教材等を工夫したり、支援の方法などを改善したりすることを積み重ねたことで、次のように子どもたちの変容があった。(エピソード記録から)

児童の変容＜例１＞

《題材初期の主な実態》

- ・特定の教師とずっと一緒にいる。
- ・何をしたいかわからず立ち尽くしていることが多い。
- ・友達と遊ぶことが少ない。



◎友達からの関わりを受け入れるようになり、自分から友達の手を引いて移動するようになった。

◎自分から遊びを探して歩き回ったり、笑顔や声を出して遊ぶ楽しさを表現して走り回ったりするようになった。

児童の変容＜例２＞

《題材初期の主な実態》

- ・一つの遊びが続かない。
- ・友達の遊びを少し真似てみたり、周りを見ていたりすることが多い。
- ・リーダーになれたことがうれしく、その役割を教師と一緒に確認しながらグループを誘導する。



◎一つの遊びを十分に楽しむようになり、友達の遊びを真似るだけでなく、自分から遊ぶようになった。

◎リーダーとしての役割を覚え、ベルや曲を手掛けりに自分から旗を持ったり、友達に「あつまれ～」と呼び掛けたりするようになった。

小学部 遊びの指導 学習指導案

日 時 平成28年11月4日(金)
3校時 10:30～11:15
場 所 小学部プレイルーム、体育館
指導者 佐藤貴子(T1) 後藤ゆり子(T2)
伊藤優子(T3) 布目みち子(T4)
山田裕子(T5) 他小学部職員6名

1 題材名

「いーなワールドへ行こう②～山の国、空の国へレッツゴー～」

2 題材目標

- (1) 山や空などに見立てた遊びのコーナーで探検隊の設定を楽しみながら、身体を動かして遊んだり、見立て遊びやごっこ遊びをしたりして遊ぶ。
(考える力、意欲をもって物事に向かう力)
- (2) 繰り返し遊ぶことで流れや遊び方が分かり、同じグループの友達を意識して、言葉を掛けたり、一緒に移動したり、友達を誘ったりして関わりながら遊ぶ。
(人と関わる力)
- (3) 簡単な約束を守って遊ぶ。
(生活する力)

3 児童と題材

(1) 児童について

小学部は男子8名、女子9名、計17名であり、学級は1年生3名、2年生3名(訪問指導を含む)、3年生6名、4年生2名、5、6年生3名と5つの学級で構成されている。コミュニケーション面においては、簡単な会話を楽しむことができる児童や、単語や発声、表情で意思表示ができる児童など実態は様々であるが、教師との関わりが中心であり、いろいろな場面で友達と関わるのが難しい児童が多い。

小学部では、学年によっては児童数が少ないため集団活動が難しいという現状や、慣れていない相手からの関わりを受け入れたり、気持ちを表現したりすることが難しいといった児童の実態が課題となってきた。そこで、集団の中で人と関わる力を高めて欲しいという願いから、今年度は小学部全体で行う遊びの指導を新設している。

1学期は、滑り台やトランポリン、ボールプールなどの大型遊具での自由遊びに取り組んだ。どの児童も、他学年の児童と場を共有しながら、自分の好きな遊びを選んで存分に体を動かして遊ぶことができた。また、友達の遊ぶ様子を見たり、教師の誘い掛けを受けたりすることで、新しい遊びに挑戦したり、友達を自分の好きな遊びに誘ったりする児童も見られるようになってきた。

(2) 題材について

「いーなワールドへ行こう①～大型遊具で遊ぼう」では、大きな集団の中で遊ぶことに慣れ、好きな遊びを選んで主体的に遊ぶ姿を目指して、大型遊具での自由遊びを設定した。

本題材で取り上げた「探検」は、学校探検をした経験や絵本の内容から「探検をしたい」と考えたり、昼休みに教師を誘ってキャンプごっこをしたりする児童がいるなど、児童にとって興味がありイメージしやすい題材である。さらに、グループでの活動を設定することで友達や教師と関わりながら遊ぶ場面を増やすことができるのではないかと考え、探検隊の設定を取り上げた。

コーナーの遊びについては、児童の興味や関心をもとに、「山の国」では主に身体を大きく動かすダイナミックな遊びを、「空の国」では主に感触遊びなどのゆっくりとした遊びを想定して場を設定している。児童の興味に応じて様々な遊びを用意しておくことで、児童が遊びのコーナーで自由に好きな遊びで主体的に遊ぶことはもちろん、教師や友達の遊び方を見てまねをしたり、教師や友達を誘ったり、誘い掛けを受けたりしながら遊ぶ姿、イメージを膨らませながら見立て遊びやごっこ遊びを楽しむ姿が見られるのではないかと考える。

また、遊び方の似ている児童同士の組み合わせや、リーダーやそれをサポートする役など期待する役割を考慮してグループ分けをすることで、これまで関わる機会の少なかった友達とも触れ合う機会が増えたり、それぞれの児童が自分のグループが分かって友達と一緒に活動したりする姿を引き出すことができるのではないかと考え本題材を設定した。

(3) 指導にあたって

- 安全に遊ぶことができるように、トランポリンやマットの山、送風機などの近くに待機して見守る。児童が友達と順番に遊具を使ったり、高いところで友達を押したりすることのないよう適宜指導する。

- ・児童が自分もやってみたいと思えるように、始めは教師と一緒に遊びながら、遊び方を伝える。児童同士で遊びを進めている際には、教師の支援を徐々に減らしていく。
- ・児童が意欲的に遊びに取り組んだり、自由に遊び方を工夫したりできるように、遊具の近くにリュック、帽子などの小道具や新聞紙、テープなどの材料を用意しておく。
- ・児童が遊びの内容やグループでの活動をイメージできるように、遊びのコーナーのイメージマップや顔写真を用いたメンバー表などを用いたり、学校祭のステージ発表の題材と関連をもたせたりする。

4 指導計画と評価規準 【P 20 資料1】

5 本時の計画

(1) 目標

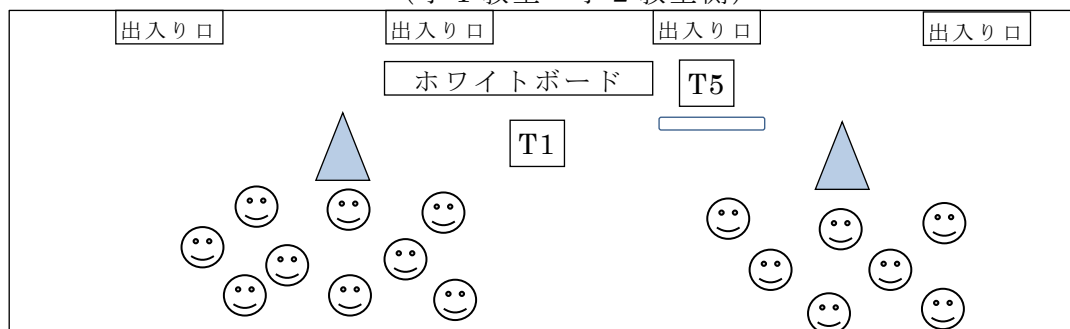
- ・山や空などに見立てた遊びのコーナーで探検隊の設定を楽しみながら、体を動かしたり、見立て遊びをしたりして遊ぶ。 (考える力、意欲をもって物事に向かう力)
- ・同じグループの友達を意識して、言葉を掛けたり、一緒に移動したり、友達のまねをしたりしながら遊ぶ。 (人と関わる力)

(2) 児童の実態と目標 (評価基準) < P 19 別紙1 >

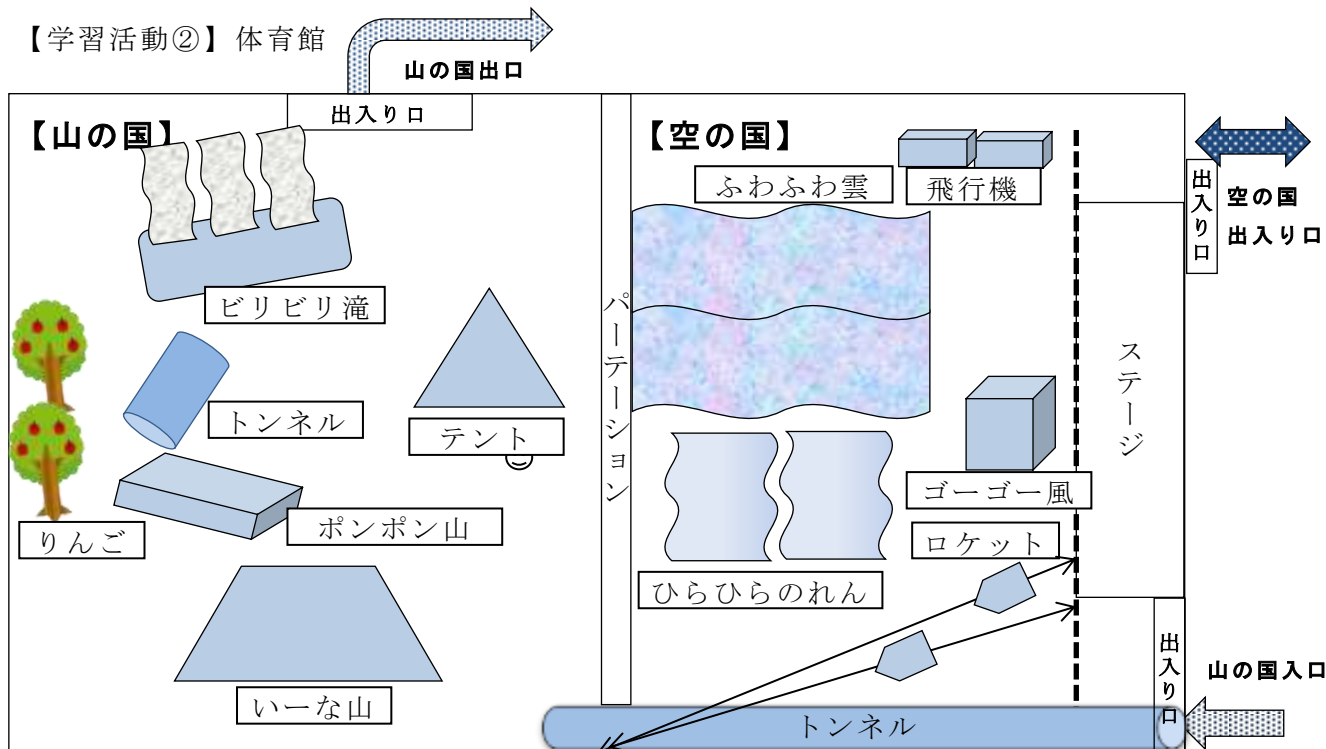
(3) 配置図

【学習活動①】小学部プレイルーム

(小1教室・小2教室側)



【学習活動②】体育館



(4) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点及び手立て	準備物												
2	1 プレイルームに集合する。	・児童が活動に期待感をもつことができるように、音楽を流して学習の始まりを知らせる。(T1)	・ラジカセ ・キーボード												
6	2 グループに分かれ、今日の活動を確認する。 【P 探検隊】 (A)(E)(F) (G)(I)(K) (M)(O)(P) 【J 探検隊】 (B)(C)(D) (H)(J)(L) (N)	・どこに集まればよいか分かるように、隊長の顔写真のついた旗や探検隊ごとに分けた顔写真を提示しておく。 ・本時の遊びに期待感をもつことができるように「いいなタイム」の歌を歌う場面を設定する。 ・探検隊や遊びのイメージをもつことができるようにコーナーの地図を提示しておき、何で遊びたいか、誰と遊びたいかなどの質問をする。(T1)	・旗 ・コーン ・ホワイトボード ・地図												
3 2	3 体育館に移動し、2つのコーナーで遊ぶ。 <table border="1" style="border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 30px;"></td><td style="width: 30px;"></td><td style="width: 30px;">前半</td><td style="width: 30px;">後半</td></tr> <tr> <td style="text-align: center;">A 探検隊</td><td></td><td colspan="2">山の国→空の国</td></tr> <tr> <td style="text-align: center;">J 探検隊</td><td></td><td colspan="2">空の国→山の国</td></tr> </table> 【山の国】 ・いいな山(マットの山) ・ポンポン山(トランポリン) ・テント ・トンネル ・りんご(カラーボール) ・ビリビリ滝(新聞紙プール) 【空の国】 ・飛行機(箱) ・ゴーゴー風(送風機) ・ふわふわ雲(ネット) ・ロケット(おもちゃ) ・ひらひらのれん(シャワーカーテン)			前半	後半	A 探検隊		山の国→空の国		J 探検隊		空の国→山の国		・遊びへ向かう意欲を高めるために、出発の合図の音楽を流し、探検隊ごとに掛け声を掛けてコーナーへ移動する場面を設定する。 ・同じグループの仲間であることが分かるように、「手をつないで」「リーダーのろに並んで」などの言葉掛けをする。 ・次のコーナーへ移動することが分かるように、音楽を流したり、鐘を鳴らしたりする。 ・やり取りする楽しさを感じながら遊ぶことができるように、一緒に「やっほー」と叫んだり、児童の呼び掛けに答えたりする。 ・キャンプのイメージを膨らませ、キャンプで使用する物を作って遊ぶことができるように、「テント」に新聞紙やガムテープを置いておく。 ・友達と飛行機乗り遊びをすることができるように、段ボール箱を連結させ、置いておく。 ・友達の遊び方に注目し、一緒に遊ぶことができるように、友達の遊んでいる様子を伝え、教師もまねて遊ぶ。	・トランポリン ・マット ・セラピーマット ・巧技台 ・ビニールプール ・ボール ・テント ・リュック ・帽子 ・新聞紙 ・ガムテープ ・風船 ・梱包シート ・クッションシート ・送風機
		前半	後半												
A 探検隊		山の国→空の国													
J 探検隊		空の国→山の国													
3	4 終わりの合図でプレイルームに集合する。	・児童が遊びの終わりを意識できるように、鐘を鳴らす。(T1) ・遊んだ満足感や楽しい気持ちを友達と共有できるように、「ゆびとゆび」の歌に合わせて手を合わせる場面を設定する。	・鐘 ・キーボード												
2	5 学年ごとに教室に戻る。	・楽しい余韻を味わいながら終わることができるように、手を振って児童が教室に戻るのを見送る。(T1)													

(5) 評価

- 【児童】**・好きな遊びを選び、体を動かしたり、見立てたりして遊ぶことができたか。
・友達と一緒に移動したり、教師や友達の様子を見てまねたりしながら遊ぶことができたか。
- 【教師】**・児童が教師や友達を意識し、関わりながら遊ぶための支援ができたか。
・児童が主体的に遊ぶことができる環境設定ができたか。

＜別紙 1＞抜粋

（2）児童の実態と目標（評価基準） 関：関心・意欲・態度 思：思考・判断・表現 技：技能 知：知識・理解				
名前	題材に関する実態	題材の目標（評価基準）	本時の目標（評価基準）	本時の支援
A	・空の国では、梱包シートなどの素材の感触を楽しんで遊んでいる。山の国では、興味のあるコーナーや関心のある人を目指して、次々と移動して遊ぶ。 ・特定の教師や友達の側に行き、タッチして遊ぼうとする。	・好きな遊びを選び、教師や友達のまねをして時間いっぱい遊ぶ。 ＜関・技＞ ・教師を介して、友達と関わったりまねしたりして遊ぶ。 ＜思・知＞	・教師を介して、特定の友達に「りんご」や風船を渡し、優しくタッチして遊ぶ。 ＜思・知＞	・車椅子の児童の側に来たときに「りんご、ほしいな」などと依頼をする。持ってきたときに、タッチの力加減が分かるように、「そっと、ありがとうのタッチ」と言葉を掛ける。
B	・空の国では、クッションシートの感触を楽しんでいることが多い。風船が好きである。山の国では、トランポリンで体を動かしたり、「テント」を家に見立てたりして遊んでいる。 ・徐々に場や人に慣れてきて、他学年の教師を誘って遊んでいる。	・好きな遊びを選び、遊び方を工夫しながら楽しむ。 ＜関・思＞ ・同じグループの友達と一緒に移動したり、他学年の教師や友達と同じ場で遊んだりする。 ＜関・知＞	・「テント」で、教師や友達と場を共有して、自分で考えたごっこ遊びを楽しむ。 ＜関・思＞	・本児の誘い掛けや関わりに対し、楽しい雰囲気に応じて一緒に遊ぶ。 ・「テント」にいる他の児童に「風でテントが揺れているね」などと本児が考えた状況を説明し、場を共有して遊べるように仲介する。
C	・一通りコーナーを回って、時間いっぱい遊ぶ。キャンプの見立て遊びが好きである。 ・夢中になると、側で遊んでいる友達の様子に気付かず、物の貸し借りや順番が分からなくなるときもある。ルールを思い出すと守ることができる。	・ルールを守りながら、見立て遊びや工夫した遊び方を楽しむ。 ＜関・技・知＞ ・山の国で、教師やグループの友達とキャンプごっこをして遊ぶ。 ＜関・思＞	・山の国で、教師と一緒にキャンプに必要な物を用意し、探検に出掛ける。 ＜関・思＞	・本児のキャンプのイメージに沿って、新聞紙で用具や食べ物を少しだけ作っておき、一緒に作って遊ぶよう誘う。 ・探検に出掛けるきっかけとなるよう、「いいな山」にいる教師や友達におにぎりなどを届けるよう依頼する。

名前	題材に関する実態	題材の目標（評価基準）	本時の目標（評価基準）	本時の支援
M	・通院等により、本題材にはまだ参加できていない。前題材では、トランポリンが好きで、ほとんどの時間トランポリンで遊んでいた。 ・担任や同じクラスの児童と同じ場で遊びたがるが、他の教師の誘いを受けて、別の遊び方を試したり、友達と物のやりとりをしたりして遊ぶことができた。	・教師を介して、友達の誘いを受け入れたり友達に働き掛けたりしながら一緒に遊ぶ。 ＜関・思＞ ・グループの友達と一緒に移動することが分かり、集合や出発の合図に従って一緒に移動する。 ＜関＞	・「テント」で教師と一緒に新聞紙を使って見立て遊びをし、友達に声を掛ける。 ＜関・思＞	・新聞紙でおにぎりや食べ物などを作って見せ、一緒に作るよう誘い掛ける。 ・誰と食べたいか、誰にあげたいかなど問い掛け、友達に声を掛けるきっかけを作る。
N	・「いいな山」に登って「やっほー」と呼び掛けたり、隊長としての役割を少しずつ覚えて行動したりするようになってきた。 ・友達と関わりたい気持ちはあるが、恥ずかしさなどから誘いを受け入れることが難しい時が多い。	・「いいな山」から友達の名前を呼んだり、友達と一緒に「飛行機」に乗ったりして遊ぶ。 ＜関・思＞ ・隊長として、曲や鐘の合図を手掛かりに友達に集合を呼び掛けたり、歩くスピードを調整したりする。＜関・思・技＞	・探検隊の隊長として教師と一緒に集合を呼び掛け、友達の誘いに応じて「飛行機」に一緒に乗ったり「いいな山」で友達や教師に呼び掛けたりしながら遊ぶ。＜関・思＞	・あらかじめ集合の呼び掛け方などを伝えておいたり、友達からの誘いを受け入れやすいように、二人で行う遊びを提案したりする。
O	・教師が誘う遊びに少しずつ慣れ、落ち着いて授業に参加できるようになってきた。 ・風船などを抱きかかえたり、柔らかいマットに横になったりすることが好きである。	・自分で好きな遊びを選び、時間いっぱい遊ぶ。＜関・技＞ ・周りの様子や友達からの呼び掛けをきっかけにグループの友達と一緒に移動する。 ＜関・思・知＞	・教師や友達の誘いで、「トンネル」をくぐったり、自分で風船を拾ったりして遊ぶ。 ＜関・思・技＞	・近くの友達と名前を呼んだり、友達の遊んでいる様子を見せたりする。 ・手をつないで一緒にコーナーまで移動するなど、きっかけを作って遊びに誘う。
P	・風船遊びや新聞紙を裂く遊びに集中したり、トランポリンなど体をダイナミックに動かす遊びを楽しんだりしている。 ・色々な遊びに興味があり、教師や友達との関わりを楽しみながら遊んでいる。	・音楽や鐘の合図で探検隊の旗を取りに行き、教師と一緒に集合を呼びかけたり、みんなが集まるまで待ったりすることができる。＜関・思＞ ・一つのコーナーを一定時間、夢中になって遊ぶ。＜関＞ ・自分が興味をもった遊びを友達や教師に身振りや発声で伝えたり、風船や新聞紙などを手渡して遊びに誘ったりする。＜関・思＞	・友達や教師に、「ポンポン山」「ビリビリ滝」などの楽しさを発声や表情で伝えたり、友達や教師をまねて道具や素材を貸し借りしたりして遊ぶ。 ＜関・思＞	・実際に道具や素材を渡して、やり取りの仕方の手本を示す。 ・楽しさや面白さを表現しやすいように、本児の気持ちを代弁しながら教師も一緒に遊ぶ。

題材の評価規準の設定

【資料 1】抜粋

○題材名「いーなワ〜ルドへ行こう②〜山の国、空の国へレッツゴー〜」

○題材目標

- （１）山や空などに見立てた遊びのコーナーで探検隊の設定を楽しみながら、身体を動かして遊んだり、見立て遊びやごっこ遊びをしたりして遊ぶ。
- （２）繰り返し遊ぶことで流れや遊び方が分かり、同じグループの友達を意識して、言葉を掛けたり、一緒に移動したり、友達を誘ったりして関わりながら遊ぶ。
- （３）簡単な約束を守って遊ぶ。

○題材の指導計画と評価規準

学習活動及び時数		学習活動に即した評価規準				
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	知識・理解	技能	
1 同じグループの友達と「山コーナー」「空コーナー」の遊具で遊ぼう。 6h		①教師や友達と同じ場所で遊ぶ。（生活「遊び」） 人間関係の形成ⅢⅣⅣ 心理的な安定ⅢⅣ (山)(空) ・好きな遊具を選んで、遊んでいる。 ・教師や友達の真似をして遊んでいる。 など ①教師と一緒に集団活動に参加する。（生活「役割」） 人間関係の形成Ⅲ～Ⅳ コミュニケーションⅢ～Ⅳ (山)(空) ・同じ探検隊の友達が分かる。 ・探検隊の隊長の役割が分かって教師と一緒に取り組んでいる。 など			①教師と一緒に、楽しく手足を動かしたり、歩く、走るなどの基本的な運動をしたりする。 （体育「基本的な運動」） ②歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動に慣れる。 （体育「基本的な運動」） ①いろいろな器械・器具・用具を使った遊び、表現遊び、水遊びなどを楽しく行う。 （体育「運動遊び」） 環境の把握ⅢⅣ 身体の動きⅢ～Ⅳ (山)(空) ・各コーナーにおける体の動かし方を知り、体を動かして遊んでいる。 など	
【山の国】	トンネル	・探検隊の友達と一緒にトンネルをくぐったり、移動したりしている。	①教師などの話し掛けに応じ、表情、身振り、音声や簡単な言葉で表現する。 （国語「聞く・話す」） ①教師と一緒に身近な人に簡単なあいさつをする。 （生活「交際」） コミュニケーションⅢ～Ⅳ 人間関係の形成Ⅲ～Ⅳ	②教師や友達と一緒に簡単なきまりのある遊びをする。（生活「遊び」） ①簡単な合図や指示に従って、楽しく運動する。（体育「きまり」） 環境の把握Ⅳ コミュニケーションⅢ～Ⅳ	・四つん這いでくぐっている。	
	いーな （マットの山）	・友達の様子を真似て登っている。 ・山に見立てて友達とピクニック遊びをしている。	・友達や教師の真似をして「やっほー」と言っている。	・順番に山に登っている。	・四つん這いで山に登っている。 ・バランスを取りながら山を上り下りしている。	
	テント	・友達や教師と一緒にテントの中の雰囲気を楽しんで寝転んだり、その気持ちを発声や言葉、表情で表したりしている。 ・新聞紙やリュックなどを使ってごっこ遊びや見立て遊びをしている。		・ごっこ遊びや見立て遊びの中での簡単なルールに従って遊んでいる。（おにぎりに見立てた丸めた新聞紙を順番に並べる。一つずつ/バケツに入れるなど）		
	りんご （カラーボール）	・友達にりんごを渡したり、「どうぞ」と言って取ってあげたりしている。			・腕を伸ばしてリンゴを取ったり、バケツやリュックに入れたりして遊んでいる。	
	ビリビリ滝 （新聞紙プール）	・新聞紙を掛け合ったり、友達の真似をして一緒に紙を引っ張ったりしている。			・新聞紙を破いたり、丸めたり、細長くしたりなど、手を大きく動かしたり、指先を使ったりして遊んでいる。 ・新聞紙に体を丸めて埋まって遊んでいる。	
【空の国】	ゴーゴー風 （送風機）	・友達が風に乘せて風船やパラシュートなどを飛ばしているのを見て楽しんでいる。 ・ビニール袋などを友達の真似をして飛ばしたり、友達を誘って一緒に飛ばしたりしている。	・飛ばしている様子を見て「すごい」と友達に伝えたり、歓声を上げたりしている。	・順番を守って飛ばしたり、一つずつ風に乘せて離したりしている。	・風に乘せて飛ばすために、手を放すタイミングを考えて離している。	
	ふわふわ雲 （ネット）	・友達が乗せた風船などをいろいろな角度から眺めて楽しんでいる。 ・風船を友達に渡して乗せてもらったり、取ってもらったりしている。	・ふわふわした感触やプチプチと音が鳴る楽しさを表情や反復行動で表している。		・風船などを乗せたり、取ったりしている。	
	飛行機 （箱）	・友達を誘ったり、誘われたりして飛行機に乗っている。 ・友達や教師の真似をして、飛行機に見立てて遊んでいる。	・「空港につきます」「お乗りください」など見立てて表現している。 ・飛行機の走行音を真似て言っている。	・順番に乗ったり、待ったりしている。		
	ひらひらのれん （シャワーカーテン）	・友達や教師が暖簾の間から見え隠れしているのを楽しんでいる。 ・飛行機で暖簾をくぐって遊んでいる。	・ひらひら揺れる動きや揺らす感触を表情などで表しながら遊んでいる。		・手を伸ばして揺らしている。	
2 グループの友達と一緒に宝探しをしよう。 3h ※上記の【山の国】【空の国】の遊びの中で宝探しをする。		②集団活動に参加し、簡単な係活動をする。（生活「役割」） 心理的な安定ⅢⅣ 人間関係の形成Ⅲ～Ⅳ 環境の把握Ⅲ～Ⅳ (山)(空) ・探検隊の隊長の役割を覚え、曲やベルの合図で集合の合図を出したり、旗を持って移動したりする。 ・友達と一緒に宝を探すことが分って遊んでいる。 など	③見聞きしたことなどのあらましや自分の気持ちなどを教師や友達と話す。（国語「聞く・話す」） 人間関係の形成Ⅲ～Ⅳ コミュニケーションⅢ～Ⅳ (山)(空) ・楽しかったコーナーを紹介したり、友達や教師に伝えたりする。 ・友達に宝のありかを伝えたり、一緒に探そうと誘ったりする。 など	③友達とかかわりをもち、きまりを守って仲よく遊ぶ。（生活「遊び」） ②簡単なきまりを守り、友達ともに安全に運動する。（体育「決まり・安全」） 環境の把握ⅣⅣ コミュニケーションⅢ～Ⅳ (山)(空) ・友達と一緒に、譲り合ったり、宝の場所を伝えて助けたりしながら、友達と宝探しをしている。 など	環境の把握Ⅳ 身体の動きⅢ～Ⅳ (山)(空) ・宝が隠れている場所に合わせて身体を小さくしたり、伸び上がったりにして宝物を取る。 ・指先や手首などを使って宝物を開ける。 など	

児童個々の評価基準（本時・授業時）

【資料2】

小学部 5・6年 1組 氏名 N

題材の評価基準		・探検隊の隊長として、曲やベルの合図を手掛かりに、同じ探検隊の友達に集合を呼び掛けたり、一緒に移動できるよう歩くスピードを調整したりする。 ・「いーな山」から友達の名前を呼び掛けたり、友達と一緒に「飛行機」に乗ったりして遊ぶ。 ・複数のコーナーを夢中になって遊ぶ。					
月日	本時の評価基準（☆）	評価・エピソードなど	関	思	技	知	評価方法
9/16 (金)	☆グループのリーダーであることが分かり、グループの旗を持ったり、同じグループの友達と一緒に移動したりする。	・グループのリーダーであることがうれしく、グループの集合場所で友達や教師に「おーい」と呼び掛けていた。	○	○	○	○	観 察 及 び VTR
	☆「いーな山」からグループの友達や教師に「やっほー」と呼んだり、「飛行機」に挑戦したりする。	・初めての行う題材であったため、周りの様子を見ながら慎重に動いているようだったが、「いーな山」から「おーい、やっほー」と遠くにいる教師に向かって何度も呼び掛けたり、手を振って合図を出したりしていた。 ・教師が「飛行機」に乗ってみようと誘うが乗らなかった。	○	○			
	☆「ビリビリ滝」や風船などで夢中になって遊ぶ。	・「いーな山」と「ポンポン山」と「りんご」で遊ぶが、2～3回跳んだり、数個ボールを取ったりするとすぐに次の遊びに移動した。「ビリビリ滝」に行くことはなく、風船でも2～3回打ち上げただけで、その後は周りを見ながらぐるぐる歩き回ることが多かった。	○		○		
9/23 (金)	☆リーダーとしての役割が分かり、旗を持って移動したり、友達に集合を呼び掛けたりする。	・教師と一緒にリーダーとしてやることを確認しながら、グループの先頭に立って移動したり、教師の呼び掛けで旗の場所に来たりすることができた。	○	○	○	○	観 察 及 び VTR
9/27 (火)	☆探検隊の隊長として、曲やベルの合図を手掛かりに、同じ探検隊の友達に集合を呼びかける。	・遊びの途中でも音楽が鳴るとグループの旗を自分で取りに行くことができた。自分から友達に集合を呼び掛けることはなかったが、教師と一緒に「おーい」と笑顔で呼び掛けた。	○	○		○	観 察 及 び VTR
	☆「いーな山」から友達の名前を呼び掛けたり、友達と一緒に「飛行機」に乗ったりして遊ぶ。	・友達の名前を呼び掛けてはどうかと提案したが、恥ずかしくなり「いーな山」から下りる。 ・友達から何度も誘われて一緒に飛行機に乗る。始めは恥ずかしそうに歩いていたが、少しずつ慣れ、小走りになったり、周りの友達や教師に「おーい」と楽しさを伝えたりしていた。	○	○			

全校授業研究会後の改善点及び児童の変容

○第2回全校授業研究会（小学部授業提示）のグループ協議等からの意見を参考にさらに授業改善をしたことで、次の表のような変容もあった。

<改善点及び改善した点>	<指導の実際と児童の様子（☆）>
①児童の関わりについて - 友達と関わって遊んだり、児童の関わりを広げたりしていくためにリーダー以外にも役割を設定してはどうか。 ex:「ゴーゴー風」のカウントダウン係 特定の役割を設定するのではなく、「ゴーゴー風」でのカウントダウン係をみんなで一緒にやる。 - 必然的に児童同士で遊べるように教師が演示してみはどうか。 - 遊ぶ道具（風船）がなくなっても、教師が補充するのではなく児童の動きを見守ってはどうか。 遊び方を教師が演示したり、児童の動きを見守ったりする。	☆始めは教師が主導でカウントダウンしていたが、児童が自分からカウントダウンを言うようになった。また、友達とタイミングを合わせて風船などを放すようにもなった。  ☆「ビリビリ滝」などで、紙を舞い上げたり、隠れて見せたりと教師が率先して遊び方を演示することで、その遊び方を真似して遊ぶだけでなく、そのコーナーに児童が集まるようになり、必然的に児童同士の関わりも増えた。 ☆児童の遊びを見守るだけでは児童の関わりは増えないため、教師が間に入ってつなぎ役をする必要があった。
②教材・教具や環境設定の工夫について 「ロケット」両端に立って友達と一緒に操作する、もっと大きくする、音が鳴るなど工夫してはどうか。 ひもをすべりやすくし、台を置いて両端に立つなど、友達と一緒に操作する。 - 遊具を発展させたり、改良したりすることで活動が充実するのではないか。 「ビリビリ滝」を何回も切ることができるように新聞紙を多く準備する。	☆紐をゴムに代え、踏み台を用意した。手首を使って操作するため、うまく操作できず諦めてしまう児童もいたが、「ロケット」を持って移動したり、台に登って周りを見渡したりして遊ぶことがあった。「ロケット」を滑らせてやり取りすることもあった。 ☆何回も切れるように準備をしたが、何度も切って遊ぶ児童はいなかった。体を埋めたり、魚を探したりなどそれぞれの遊び方に広がりが出てきた。
③発信と受信の統一について 「りんご」をボールとしたり、りんごとして遊んだりとズレがあった。りんごに見えるように、茎を付けるとか葉っぱを付けるなどより具体的に見える物を準備してはどうか。 りんごに見えるように、茎や葉っぱを付ける。	☆葉っぱや茎のシールを貼ったが、それを剥がすことに執着してしまう児童もいた。りんごを山から転がしてそれを受け止めるやり取りをしたり、色で「赤とって！緑とって！」と依頼したりするなどの関わりが多くあった。 
④教師の配置・数について 支援する人数を少しずつ減らす、安全確保のため「山」に二人配置する。	☆安全面の確保ができただけでなく、山で遊ぶ児童への支援も充実した。（リンゴ転がし、おにぎり食べ、やまびこなどの遊び）

- 高学年の児童は、グループのリーダーとしての役割をもつことで、旗を持って先頭を歩いたり、グループの友達が集まるまで待ったりするなど、リーダーとしての気持ちが育ってきた。また、低学年の児童は、リーダーの後ろをついて歩いたり、リーダーをサポートしてくれたりするようになってきた。それぞれが各グループのまとまりを意識するようになり、お互いに集合を呼び掛ける様子も出てきた。

7 成果と課題

(1) 成果について

① 評価システムについて

ア 評価する時間の設定

- ・授業後すぐに振り返りの時間を設定し、即時的な評価をしたことで、児童の小さな変化や様子についてたくさん意見交換することができた。また、VTRに映っていないことも伝え合うことができ、より細かな変容を捉えることができた。

イ VTRの活用

- ・VTRを見ながら話し合いを進めることで、児童の変容や情報交換など、学部全員で共有することができた。
- ・児童同士の関わりや遊びの広がりなど、実際の場面では見逃していた児童の様子に改めて気付くことも多く、小さな変化もエピソード記録として積み重ねることができた。
- ・児童の変容に伴って、次の授業実践に向け、教材・教具や支援の方法、教師の配置など、どのように改善していくかもVTRを見ながら話し合い、検証することができた。

ウ エピソード記録の活用

- ・VTRの活用と合わせて、毎授業後に付箋に記入することで、小さな変容も記録に残すことができた。付箋を見返すと同じコーナーで遊んでいても遊び方が変化したり、一緒に遊ぶ児童が変わったりと変容がより明確になった。
- ・エピソード記録の積み重ねが、その児童の変容を読み取っていくだけではなく支援の積み重ねにもなっていたため、付箋を見返すことで児童の遊びにあった適切な支援であったかの検証もすることができた。
- ・複数の教師がエピソード記録を取り、様々な視点から児童の様子を観察したり、支援したりするため、新たな発見になったり、次の支援の気付きにもつながったりした。

エ APDCAサイクルの定着

- ・授業実践→VTRによる検証・エピソード記録の整理・評価改善→授業実践を毎回行ったことで、児童の小さな変化に応じた改善をすぐに実践に生かすことができた。また、学部の職員全員で情報を共有したことで、支援が統一でき、そのことで、児童が遊びに集中することが増えたり、新しい遊びを探したりする姿が増える一因になったと考える。

② 評価規準について

- ・児童の遊ぶ姿をイメージしながら、遊びの各コーナーで詳細な規準を示し、共通理解したことで、ねらいが明確になり、支援の仕方を工夫することができた。

③ 授業実践について

ア 指導計画の見直し

- ・児童の実態や授業を評価していく中で、指導計画の見直しを行った。指導時数を増やし、場面設定の改良や遊びのコーナーの改善をしながら、長いスパンで一つの題材に取り組んだことで、遊び方に変化があった。一つの遊具に

こだわることなく、様々な遊具で存分に遊んだり、コーナーの遊び方を覚えて楽しむことができたりした。また、教師が想像していない遊び方をしたり、関わる友達が増えたりなど、遊び方に工夫や発展があった。

イ グループINGの適正

- ・児童の実態や遊び方等を考慮して、2つにグループINGして活動した。児童にとって適切な人数であったため安心感につながり、グループで集まったり、移動したりすることで、気持ちの切り替えになり、安心して次の活動に移ることもできた。
- ・リーダーや同じグループの友達であるという仲間意識が生まれ、遊びの時間に限らず、休み時間や他の合同の学習の時間など他学年の友達と遊んだり、声を掛け合ったりすることが増え、関わりが広がった。

ウ 指導内容、環境の設定の妥当性

- ・児童の興味や関心から、主に身体を大きく動かすダイナミックな遊びをする場、主に感触遊びなどのゆっくりとした遊びを想定した場を設定したことで、児童が自分で遊ぶコーナーを選び、好みのコーナーなどを見付けることができた。また、友達と場を共有する姿、他の友達が遊んでいる場に自分から入っていく姿など児童の様々な変化を確認することができた。

(2) 課題について

① V T Rによる検証方法とエピソード記録の継続について

- ・今年度は、抽出児童は設定せず、全体を把握したり、短期間グループごとに評価した検証を行った。全体の様子を把握したり、二つのグループの遊び方を交互に検証したりすることはできたが、継続的に評価、改善するためのV T Rの活用には至らなかった。

→学部全体で共通理解を図りながら児童の変容を捉えていくためにもV T Rによる検証は継続する。合わせて、来年度の児童の実態や指導内容、指導方法等を考慮しながら、抽出児童またはグループ、遊具(コーナー)など限定して検証したり、継続して評価したりできるようV T Rの撮り方や活用方法を絞るなど改善していく。

→エピソード記録の積み重ねは児童の変容だけでなく、支援の積み重ねにもつながったため、来年度も継続して行っていく。

② 評価規準の見直しとアセスメントの充実について

- ・コーナー毎に設定した評価規準を共通理解したことは有効であったが、設定した規準では対応できないほど、児童の遊びは個々によって異なり、新しい遊びを展開するなどその幅も広がった。そのため、ねらいを絞るのは困難であり、児童の気持ちに寄り添った指導との相違があった。

→コーナー毎のねらいを確認することは必要だが、評価規準を細部にわたって設定し、明記することで、児童の遊びを制限した指導になってしまう可能性もある。そのため、幅のある規準の設定をしていきたい。合わせて、評価規準を検討するためにも、児童の実態を把握する必要があると考える。遊びの分類から本校小学部にあった指標を作成し、プロットしていくことで小学部の子どもたちの傾向を把握し、評価規準の設定や授業実践に生かしたい。(目指す姿をプロットするのではなく、実態把握のための指標とする)

③評価システムを活用した検証授業について

- ・今年度は学部合同の遊びの指導を取り上げて研究を進めてきた。全児童を全職員でその変容等を捉えたり、一人一人に応じた遊びを設定できたりすることができた。また、合同遊びではあったが、8人程度の2グループでの活動を設定したことで遊びに対しての安心感や仲間意識を高めることもできた。合同遊びの利点は多くあったが、一人一人の変容を細かく継続して検証することは難しかったり、一人一人を考慮した評価規準の設定が困難だったりとした課題もあった。

→来年度の学部の実態や遊びの指導の指導内容等から今年度同様の評価システムを活用して学部合同の遊びの指導で検証するか、または今年度の評価システムを応用し、子どもたちの実態から一人一人をより焦点化するため、小学部低学年、中学年、高学年の学習グループでの検証を学部で共通理解を図りながら進めるか検討したい。



～遊びの様子～

Ⅱ 中学部

自分で分かって動く姿を目指した
作業学習の授業実践

～評価システムの活用による課題改善への取組～

Ⅱ 中学部について

1 中学部の研究テーマ

自分で分かって動く姿を目指した作業学習の授業実践
～評価システムの活用による課題改善への取組～

2 テーマ設定の理由

(1) 生徒の実態

中学部は 17 名の生徒が在籍しており、1 年生 4 名、2 年生 10 名（2 学級）、3 年生 3 名（内 1 名は訪問教育対象）と 4 つの学級で構成されている。

身辺処理に関しては、ほぼ自立している生徒、日常生活全般で支援が必要な生徒、教室の移動時は車いすを使用している生徒など実態は様々である。

中学部では、カードや写真、予定表等の視覚情報を活用することで安定して学習に取り組める生徒や、危機回避が難しく、常時安全面での配慮が必要な生徒など、様々な実態の生徒と一緒に学習している。作業学習を含め、音楽、保健体育、総合的な学習の時間においては、学年縦割り、または学部が一つの集団になって活動することも多い。

昨年度の研究では、「生徒が学習集団の中で役割を担い、意欲的に活動するための授業実践」というテーマのもと、作業学習における環境づくりの工夫を通じた実践を重ねてきた。その結果、以下のような生徒の変容が見られた（本校研究紀要第 29 集 2016 より一部抜粋）。

- ・工程を整理し繰り返し行うことで、生徒が自分の作業を理解して自信をもって意欲的に取り組めるようになった。
- ・生徒が一人で作業できるように環境を整え、補助具を工夫したところ、製品を完成できたという達成感が高まり自発的に次の作業に取り掛かるようになった。
- ・製品の仕上がりを確認できる補助具を用意することで、精度を意識して作業できるようになった。
- ・より良い製品が出来たことに喜びを感じて、次の活動への意欲につながった。

(2) 中学部における作業学習について

中学部では、週に 4 時間の作業学習を実施しており、陶芸班、手工芸班、園芸班に分かれて学習している。中学部は作業学習に初めて触れる段階であるため、働くことに関心をもち、働く喜びを味わいながら活動することをねらいとして取り組んでいる。また、あいさつや返事、報告など日常生活を送る上で基本となる事項の習慣化を図ることもねらいとしている。

前期・後期の作業学習週間では、集中力を持続し、最後までやり通そうとする力を高めることをねらいとしている。また、学校祭等での作業学習製品販売会や、地域交流をした方々へ製品をプレゼントすることで、様々な人と関わり、自分たちの製品を喜んでもらう経験につなげている。

昨年度までの研究から、作業学習での生徒一人一人の伸ばしたい力を具体化して共有すること、主体的な選択場面や思考・判断場面の設定や教材・教具の工夫をすること、生徒が作業学習の成果をより実感できるような評価の仕方や場の設定が必要であること、生徒の変容を生徒と教師で共有できるような評価方法を検討することなどが課題としてだされた。

そこで今年度は、作業学習において、生徒が自分の活動ややるべきことが分かり、

自分から、自分で取り組めるようになる（自分で分かって動く）ための支援の評価を行う。学習目標（どんなことを、どれだけでできればいいのか）を生徒が理解するための手立てやアプローチについて、また、学習目標を達成するための手立てやアプローチについての評価を行う。

以上より、昨年度までの成果と課題、今年度の実態等を受けて、本研究テーマを設定した。

3 研究仮説

作業学習において、評価システムを活用した課題改善に向けた評価・改善の取組を重ねていくことで、生徒が自分の活動ややるべきことが分かり、自分から、自分で取り組めるようになる。

4 研究の内容・方法

評価システムの構築と活用（P D C A サイクル）

- ・単元計画・単元の評価規準の設定（P）
- ・生徒個々の評価基準の設定（P）
- ・授業実践（D）
- ・授業の評価と改善に向けて、カンファレンス（P2 6 参照）の実施（C、A）

5 研究計画

【1 年次】 「自分でできるための支援」

- ・中学部の評価システムの作成と活用を行う。
- ・作業学習において、評価システムを活用した課題改善に向けた評価・改善の取組を行う。

【2 年次】 「自分ができたことを実感し、集団の中で生徒同士が認め合うための支援」

- ・1 年目の成果と課題を受けた効果的な授業作り。
- ・自己評価や他者評価、相互評価等を効果的に取り入れた授業づくりを行う。

期 日	主 な 研 究 内 容
5 / 2 6 (木)	学部研究会①（中学部の研究について提案）
5 / 3 1 (火)	学部研究会②（研究テーマの決定、研究方法の検討）
8 / 5 (金)	学部研究会③（研究の進捗状況と2 学期以降の研究について検討）
9 / 2 (金)	学部研究会④（2 学期以降の予定の確認）
9 / 2 1 (水)	全校授業研究会（高等部）
1 0 / 2 6 (水)	学部研究会⑤（陶芸班授業研究会、全校授業研究会協議題の確認）
1 1 / 4 (金)	全校授業研究会（小学部）
1 1 / 9 (水)	学部研究会⑥（指導案検討会）
1 1 / 2 5 (金)	全校授業研究会（授業提示：中学部 作業学習・陶芸班）
1 2 / 1 (木)	学部研究会⑦（全校授業研究会を受けて授業の見直し、来年度に向けて①）

1 / 2 3 (月)	学部研究会⑧ (学部研究の評価、来年度に向けて②)
2 / 1 7 (金)	学部研究会⑨ (研究紀要原稿の読み合わせ)
3 / 8 (水)	学部研究会⑩ (来年度に向けて③)
* 毎週金曜日	カンファレンスを実施

6 研究の実際

(1) 学部研究での内容

評価システムの構築と活用

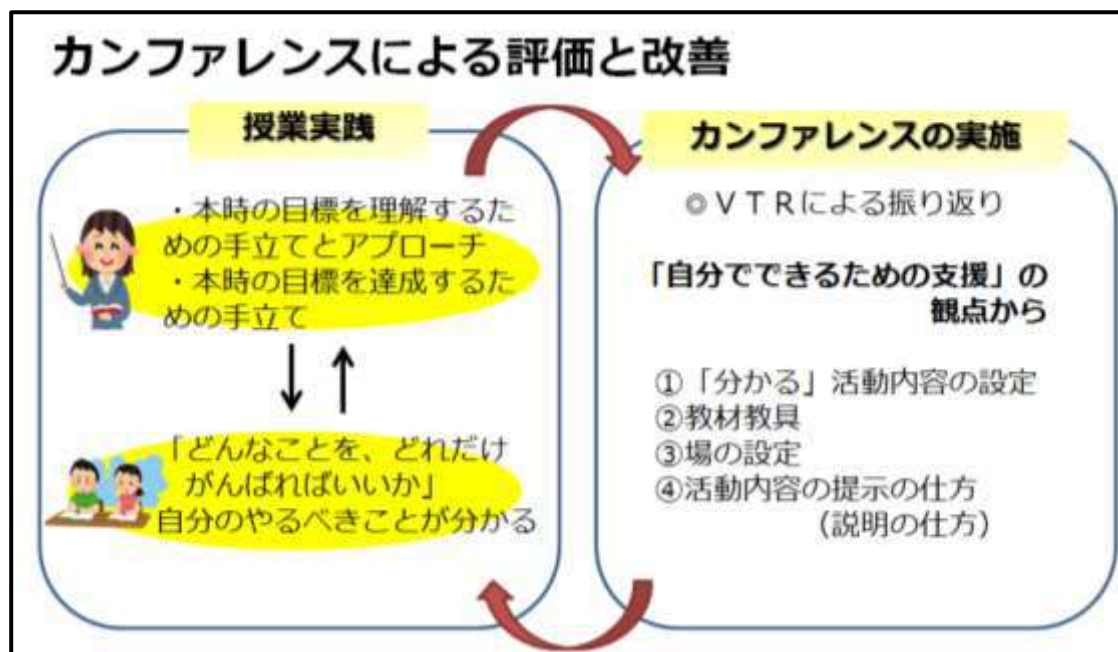
①単元計画・単元の評価規準の設定 (P39 参照)

作業班や作業種ごとに、単元計画及び単元の評価規準の設定を行った。設定した後、学部研究会で評価規準表を見合い、共通理解をするとともに、修正を図った。

②生徒個々の評価基準の設定 (P40 参照)

単元計画や単元の評価規準、個別の指導計画の前期 (後期) 目標などを受けて、生徒個々の評価基準を設定し、授業実践を行った。評価基準は1単位時間ごとに設定をし、毎週金曜日に、教師個々に記録を取ることとした。

③カンファレンスの実施



(図 1)

☆カンファレンスについて

生徒が「自分で分かって動く」ための支援の評価を行う。学習目標（どんなことを、どれだけでできればよいのか）を生徒が理解するための手立てやアプローチについて、学習目標を達成するための手立てについての評価を行う。

○カンファレンスを活用した授業改善

- ・毎週末に学部職員全員で実施する。
- ・生徒の活動の様子を撮影したV T Rを視聴し、自分でできるための支援（※P28 図1 参照）について、良い点や改善点、改善案などを挙げる。
- ・カンファレンス後、作業班担当者が、出された改善案の中から次時の授業に取り入れることを決める。
- ・後日のカンファレンスで、改善案を取り入れた結果、授業がどのように変わり、生徒の姿がどのように変わったか（変わらなかったか）について、確認をする。

以下では、「自分でできるための支援」の観点から行ったカンファレンスでの記録やその後の変容などについて、一部抜粋して記載する。

自分でできるための支援：①分かる活動内容」の設定

Ｌさん（中２・女子） 手工芸班（ミシンを使っての布製品の製作）

目標 ①布に付いた印に沿って、ミシンで直線縫いをする。

◆改善前

これまでの生徒の様子	・ミシンを使用する作業は今年度が初めてである。布に付いた印から外れることはあるが、自分でミシンを操作して直線縫いができる。 ・長い直線を続けて縫うことは難しく、途中で休憩をしながらランチョンマット（30cm×35cm）を製作している。
目標を理解するための手立てやアプローチ （※①、②等の数字は目標に対応）	生徒の様子等 （◆：考えられる要因など）
①縫い代1cmで布地に赤や青のチャコペンシルで印を付ける。	ランチョンマット製作
①印通りに縫った実物の手本を提示する。	・裁縫中に手元に集中できず、よそ見をしてしまう。 ・縫い目が印の線から外れて曲がってしまうが、作業中本人は気付かないようである。
目標を達成するための手立て	◆一辺が長く、Ｌさんが集中できる範囲を超えているのではないかな。
①作業中に「手元をよく見てね」と言葉掛けをする。	◆ランチョンマットは作業工程が多く、「印に沿って縫う」ことに注意が向きづらいのではないかな。
	◆布と同系色の糸では、作業中に縫い目を確認することが難しいのではないかな。

カンファレンスによる評価と指導の改善

◆改善後

目標を理解するための手立てやアプローチ （★：前時と変えた点）	生徒の様子等
★活動内容を変え、作業工程が少なく縫い目の仕上がりが気にならない製品（雑巾）の製作に変えた。	雑巾製作
★色つきの糸を使用し縫い目を分かりやすくした。	・1度手本を示しながら製作しただけで工程を覚え、自信をもって取り組んだ。 ・縫う糸を色糸に変えたことで縫い目が見やすくなり、印に沿ってミシンを掛けることができた。
目標を達成するための手立て （★：前時と変えた点）	
★即時評価を増やし、曲がってしまったことに気づけるようにした。	雑巾製作→コースター製作へ
	・雑巾製作ができるようになった後、1辺13cmのコースターを製作した。印に沿って縫うことが定着し、よそ見をせず4辺続けてミシンを掛けられるようになった。



＜授業後の評価＞「分かる活動内容」の設定

★課題とされる要素を多く含む作業内容（ランチョンマット製作）から、要素が少ない作業内容（雑巾製作）へと変えたことで、「気を付けるべき箇所」が課題として生徒にはっきりと認識され、集中して取り組むことができた。

★集中できる時間内で製品が完成するため、製作への意欲が高まった。結果として「できた経験」を無理なく積み重ね、少し難易度の高い課題（コースター製作）にも抵抗なく挑戦することができたのではないかな。

自分でできるための支援：②教材教具の工夫

Hさん（中2・男子） 園芸班（空き缶リサイクル。プルタブを取り、缶をつぶす。）

目標 ①プルタブ取りの作業（プルタブを取り外して容器に入れる。プルタブを外した缶を1本ずつケースに入れる）を一人で行う。

◆改善前

これまでの生徒の様子	・教師が容器をもって入れ口を指し示すと外したプルタブを入れることができるが、一人だと外した缶の中にそのままプルタブを入れてしまう。 ・プルタブ取りの作業の途中で嫌になり、泣いたり場を離れたりすることがある。
目標を理解するための手立てやアプローチ （※①、②等の数字は目標に対応）	生徒の様子等 （◆：考えられる要因など）
①外したプルタブを入れやすいように、机の上に入れ口の大きい容器（開口部5cm）を準備する。	・外したプルタブを、缶の中にそのまま入れてしまう。 ・始めのうちは続けて作業に取り組めるが、途中で嫌になり、泣いたり場を離れたりする。
目標を達成するための手立て	◆「容器に入れる」活動自体に魅力が足りないのではないか。
①缶を手渡したり、容器の入れる箇所を指で示し「ここだよ」と言葉掛けをしたりする。	◆容器は机の上に置いていたので、「手にした缶のプルタブを取る」→「容器に入れる」活動は、視線を上下に大きく動かさないと容器を認識できないため、2つの別々の活動となり、分かりにくいのではないか。

カンファレンスによる評価と指導の改善

◆改善後

目標を理解するための手立てやアプローチ （★：前時と変えた点）	生徒の様子等
★容器を視線に近い高さに設置した。 ★「容器に入れる」活動自体に楽しさを感じられるように、容器の入れ口を貯金箱のような入れ口に変えた。	 容器の入れ口をよく見て、指示がなくても一人でプルタブを取って、入れることができた。また、作業の途中で手を止めることはあったが、泣いたり、場を離れたりすることは少なくなった。
目標を達成するための手立て （★：前時と変えた点）	
★Hのペースで取り組めるように、できるだけ見守るようにした。	

＜授業後の評価＞教材教具の工夫

★「細い隙間にプルタブを入れる」という行為自体が楽しく感じられたようであった。

★容器を視線に近い高さに設置したことで、①プルタブを取る、②容器に入れるという活動が、分割した活動としてではなく、一連の（合わせた）活動として認識され、活動が分かりやすくなったのではないかと考えられる。

自分でできるための支援：③場の設定 ④活動内容等の提示の仕方（説明の仕方）

Fさん（中2・男子） 陶芸班（泥しょう粘土の流し込みによるビアカップの製作）

目標 ①自分で流し込みカップを持って、石膏型の近くまで動かす。

②石膏型の穴の中に粘土を注ごうとする。

◆改善前

これまでの生徒の様子	・周りの様子が気になり、友達を見ていることが多いが、言葉を掛けると流し込みカップを見る。 ・石膏型に一人で粘土を注ぐのは難しく、教師が手を添えて途中まで一緒に行っている。
目標を理解するための手立てやアプローチ （※①、②等の数字は目標に対応）	生徒の様子等 （◆：考えられる要因など）
①②注ぐ穴が分かるように、石膏型の穴の周りに色を付ける。	・注ぐ時にあまり穴を見ない。 ◆穴を意識するというよりは、言葉を掛けたことで穴を見る様子。
目標を達成するための手立て	
②注ぐ際に「見ます」と言って、穴を指さす。	・粘土を注ぐときに、こぼしてしまうことがある。 ◆作業机が高いため、腕を大きく動かせないからではないか。

カンファレンスによる評価と指導の改善

◆改善後

目標を理解するための手立てやアプローチ （★：前時と変えた点）	生徒の様子等
★粘土を注ぐ前に、新聞紙玉を入れた流し込みカップで穴に注ぐ練習を一緒にした。	・教師が手を添えて、新聞紙玉を入れたカップでの練習を何回か行ってから粘土を注ぎ入れた。どう活動すれば良いのかが分かり、自分で穴を意識して流し込みカップを動かす姿が多くみられるようになった。
目標を達成するための手立て （★：前時と変えた点）	
★これまで使っていた高めの作業机から、低めの学習机に変えた。	・注ぐ石膏型の位置が低くなったことで、石膏型の穴をよく見て注ぐことが増えた。



<授業後の評価> ③場の設定 ④活動内容の提示の仕方（説明の仕方）

★新聞紙玉を入れた流し込みカップでの練習をすることで、動き方のイメージをもつことができ、手首も柔らかくなったことで、粘土を注げたのではないかと。言葉などによる指示よりも、実際に行う動きを教師と一緒にやってみることで活動の理解につながった。

★石膏型を置く位置を変えることによって、見やすくなり注ぎやすくなったと考えられる。生徒によって見やすい位置や動かしやすい位置は異なる。他の学習場面での生徒の様子を参考にしたり実際の活動の中で最適な位置を探ったりしていくことが必要である。

自分でできるための支援：④活動内容等の提示の仕方（説明の仕方）

Cさん（中1・男子） 陶芸班（たたらと石膏型を用いた角皿の製作）

目標 ①粘土の伸び具合を自分で確かめてたたらを伸ばす。

◆改善前

これまでの生徒の様子	・たたら伸ばしの手順が分かり、一人で取り組むことができる。 ・たたら伸ばしの工程では、タイマーで設定した時間（3分間程度）伸ばしている。 ・他の工程においては仕上がりを自分で判断することが増えているが、たたらの出来具合を判断する経験が少ない。
目標を理解するための手立てやアプローチ （※①、②等の数字は目標に対応）	生徒の様子等 （◆：考えられる要因など）
①生徒が本時の目標を立てる際の参考にできるように、作業日誌に課題やがんばりたいことを記しておく。	・教師のねらいと本人の目標の方向性に食い違いがある。
目標を達成するための手立て	◆生徒が適切な目標（教師と同じ方向性の目標）を立てられるような手立てが必要か。
①生徒が自分の目標を意識できるように、前時の課題などから本時の目標を考える機会を設定する。	

カンファレンスによる評価と指導の改善

◆改善後

目標を理解するための手立てやアプローチ （★：前時と変えた点）	生徒の様子等
★授業開始の目標設定時に、写真やチェックポイントのカードを示すなどして、生徒が本時の目標を考えるための材料を提示した。	・写真カードを示すことで、生徒が課題を容易にイメージすることができた。 ・チェックポイントのカードを提示したことで、自分の目標を自分で決めたり、目標をはっきりと意識したりすることができた。 ・授業後の振り返りで、「初めてタイマーなしでたたらをのばして、所々、粘土を伸ばすことができました。手前の伸ばしが足りなかったです。」と作業日誌に記入していた。適切な目標を立てることができたとともに、目標を理解し、自分で適切に評価することもできていた。
目標を達成するための手立て （★：前時と変えた点）	
★目標を生徒が一人で立てるスタイルから、教師と話し合いながら目標のすりあわせを行うスタイルへ変更した。	

＜授業後の評価＞活動内容などの提示の仕方（説明の仕方）

★生徒が適切な目標を設定するためには、写真やチェックポイントのカードなどの目標を考えるための材料を提示することが効果的である。

★本時の目標を、教師から提示されたものをそのまま受け取るのではなく、教師と話し合いながら生徒が自分で決めることが、学習への主体的な取組へとつながる。

(2) 授業実践 (※P37～40 参照)

7 成果と課題

(1) 成果について

①評価規準の設定

評価規準の設定を各作業班や作業内容ごとに行った。作業工程を細かく分析することができ、工程のポイントや身に付けたい力が明確になり、生徒の課題がとらえやすくなった。

②評価基準の設定

授業時の個々の評価基準（本時の学習目標）の提示を、生徒の実態に応じて行った。全ての生徒が「どんなことをどれだけ頑張ればよいか」が分かるように、生徒が本時の目標を理解するための手立てやアプローチの仕方を工夫した。

前回の学習を振り返って自分で本時の目標を考えられる生徒については、教師が指導し一緒に話し合いながら設定するようにした。学習目標が明確になることで、自分から学習に取り組もうとする姿勢が多く見られるようになり、学習効果が上がった。また、教師はより具体的で効果的な指導をすることができた。

③授業の評価と改善に向けて、カンファレンスの実施

作業学習の授業があった週末に、生徒の活動の様子をVTRで振り返りながら、学部職員全員でカンファレンスを行った。他の作業班の教師から、具体的な改善案が多く出され、次時の授業に取り入れることで、生徒の変容が見られるとともに、主体的な活動につながった。

また、カンファレンスで、生徒一人一人の課題についてじっくり話し合ったことで、担任や担当する生徒以外の実態や課題等についても共通理解することができ、他の学習活動に取り組む上でも効果が見られた。

(2) 課題について

①評価規準や評価基準の設定について

ア 継続できる評価システムの検討

評価規準は、設定に多くの時間を要した。

→日常的に無理なく継続していけるように、評価規準や評価基準の設定などについて、簡略化できるよう、様式や設定の仕方を見直す必要がある。

イ 評価規準の設定の仕方について

評価規準の設定の尺度が各作業班で異なっていた。

→年度当初に評価規準の設定について、学部で共通理解を図り、スムーズな設定につなげたい。

ウ 目標の整合性

単元目標として、生徒個々の部分的な行動の目標を設定しすぎてしまう傾向があり、そのために個別の指導計画の前期（後期）目標や本時の目標などとの違いが分かりづらかった。

→設定の仕方を工夫し、それぞれの目標の整合性を意識しながら基準を立てるようにしたい。

エ 評価の時期について

作業班ごとに評価の時期やタイミングにばらつきがみられた。

→評価基準の設定は单元ごとに行っているので、单元終了時に評価をし、次の单元での評価基準の設定につなげられるように統一していきたい。

②カンファレンスの実施について

ア 課題のしぼりこみ

効率よく進めるために、話し合うテーマを設定して実施したが、課題のしぼりこみが難しいと感じるケースもあった。

→個別の指導計画の前期（後期）目標や单元の目標を明確にすることで、生徒の課題を明確にし、充実したカンファレンスにつなげたい。

イ 生徒の変容について

1時間の学習の中での生徒一人一人の課題や生徒の様子などについては共通理解や評価ができたが、前期（後期）や单元を通しての生徒の変容や成果については、全員で確認する機会を設定できなかった。

→記録の取り方やカンファレンスの実施方法などについて、検討していきたい。

③作業学習の单元設定の仕方について

作業学習の单元計画が長期間で設定されていたことで、生徒の中には、見通しや達成感をもちづらい生徒もいた。

→中学部の作業学習では、作業学習の導入期の段階にあるため、生徒が作業学習の楽しさを十分に味わうことができ、もっとやりたい、またやってみたいと感じられることを特に大切にしていきたい。授業の中で即時評価を繰り返し行うことや、達成感を味わうことができるような授業内容や单元計画を設定したい。

④障害の重い生徒の作業内容や作業工程等の見直し、精選について

ア 活動内容の開発

どの生徒も「自分で分かって動くことができる」という点については、活動内容が分かって自分（一人）で取り組める活動や、継続して楽しく取り組める活動が、活動の種類、量ともに足りなかった。

→これまでの作業種や活動内容にとらわれることなく、生徒の実態から生徒の学び方や行動の特徴、好きな活動などから考えて、柔軟に設定をする。

イ 生徒個々の特徴に応じた支援、評価の仕方について

作業学習場面以外の情報等を十分に活用できなかった。

→「こうすれば（一人で）できる」といった有効な手立てについて、他の学習場面にも般化させ、次の学年や学部へとその情報を残せるような様式を作成し、記録等に残す。

⑤作業日誌の活用の仕方について

作業班によって作業日誌の活用の仕方が異なっており、目標の設定や評価の際に十分に活用できない面も見られた。

→作業日誌を効果的に学習に用いるために、日誌の内容や活用方法について検討する。

- ・目標設定と自己評価のツールとして＜本時の目標の設定と評価＞
- ・教師とのベクトルを同じにするためのツールとして
- ・他者評価のツールとして＜友達からの評価＞

中学部作業学習（陶芸班）学習指導案

日 時 平成28年11月25日（金）

3・4校時 10:30～12:10

場 所 作業学習室1

指導者 水谷 智子（T1）岩井 宏樹（T2）
谷藤 弘美（T3）

1 単元名 製品を作ろうⅢ～販売会の製品を作ろう～

2 単元目標

- （1）手本どおりに製作しようという意識をもち、道具の使い方を工夫したり、力加減を調節したりしながら製品を製作する。（意欲をもって物事に向かう力、考える力）
- （2）場面に合った言葉遣いや態度で返事や報告をしたり、自分で仕上がりを見極めたりして報告したりする。（人と関わる力、考える力）

- （3）接客にふさわしい言葉遣いや態度で販売活動をする。（人と関わる力）

※（ ）は本校キャリア教育の指標「地域とあゆむ『いーなプラン』4つの付けたい力」より

3 生徒と単元

（1）生徒について

本作業班は、1年生2名、2年生3名の計5名である。うち1名は生活面、学習面において全面的に教師の支援が必要である。2年生のうち2名は昨年度から継続して本作業班に所属しており、製作や製品販売を経験している。他1名は今年度からの所属で、自分の作業内容や作業に必要な動きが分かり、自分から作業に向かうことができるようになってきた。また、1年生は4月からの学習を経て、使用する道具を自分で準備したり、製作手順を覚えたりして、意欲的に作業に取り組めるようになってきた。

生徒はこれまで成形から完成までの過程を3度経験しており、自分が製作した製品が完成したときには、歓声を上げたり、満足そうな表情をしたりと製品が完成する喜びや、達成感を感じている。また、校内販売会や学校祭での販売会において、多くの人に製品を見てもらったり、購入してもらったりする経験を通して、製品を販売することにも喜びを感じている。

（2）単元について

陶芸班では、たたらを使用しての丸皿、角皿、豆皿の製作、流し込みでのカップの製作を行っている。丸皿は既製の皿を型に、角皿は陶芸用の石こう型を使用し製作している。豆皿はたたらを丸形で抜き、形を整える方法で製作している。いずれも製作の手順や、完成までの工程が分かりやすい。また、材料に粘土を使用することで、自由に形を変えることができ成形しやすい、また、失敗しても元に戻しやすいなどの利点がある。カップは、容器で型に泥しう粘土を流し込む動作の繰り返しで製作することができ、粘土が型にたまっていく様子が目に見えて分かりやすく、自分の作業の成果を確認できる。

生徒は販売活動の経験や、販売会やアンテナショップでの製品の売れ行きを知り、自分たちの製品がたくさんの人に購入され、喜ばれることを実感している。また2月には、地域での販売会を予定している。販売会に向けて製品を製作することで、自分たちの技術を向上させたり、より良い製品を作りたいという意欲を高めたりすることができる。さらに販売活動の経験を積み重ねることで、接客にふさわしい言葉遣いや態度を身に付けることができるのではないかと考え、本単元を設定した。

（3）指導にあたって

- ・担当教師と本時の目標を確認し、作業するために、生徒個々の作業日誌を作成し、導入及びまとめに使用する。
- ・作業工程を自分で確認しながら作業するために、生徒の理解度に合わせた工程表を用意する。
- ・長時間の作業が難しい生徒に対しては、作業を一定時間継続して行うために、適宜休憩を挟んだり、気分転換を図ったりする。

- ・周囲が気になる生徒に対して、集中して作業ができるように、作業場所を周囲とパーティションで区切る。
- ・仕上がりの良し悪しを自分で判断したり、確かめたりするために、自分が製作した製品と比較できるようなカードや手本を用意する。
- ・自分の作業を理解し、生徒が作業に対して達成感をもてるように、生徒の技能や理解度に合わせ、製作する皿の種類を増やしたり、製作方法を工夫したりする。
- ・場面に合った言葉遣いや態度で報告したり、リーダーの生徒が、自分から作業終了時に全体へ声を掛けたりすることができるように、話し方や態度について、カードで示したり、言葉掛けをしたりする。
- ・販売活動にふさわしい言葉遣いや態度を身に付けるために、話し方を例示したり、ロールプレイングを行ったりする時間を設定する。

4 指導計画と評価規準 <別紙1>

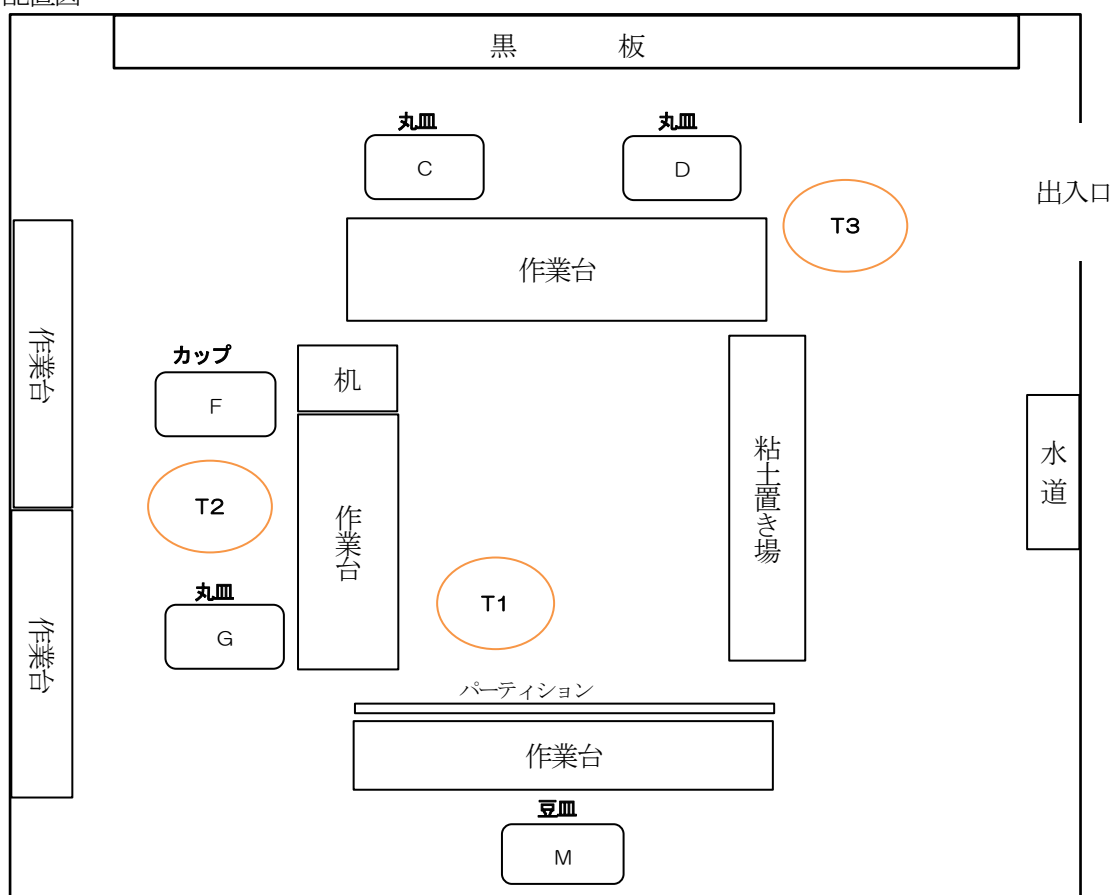
5 本時の計画

(1) 目標

- ・正しく道具を使ったり、力加減を調節して粘土を扱ったりしながら成型する。
(意欲をもって物事に向かう力、考える力)
- ・場面に合った言葉遣いや態度で、返事や報告をしたり、自分で仕上がりを確かめてから教師に報告したりする。
(人と関わる力、考える力)

(2) 生徒の実態と目標 (評価基準) <別紙2>

(3) 配置図



(4) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点及び手立て	準備物
10	※授業開始前に作業日誌を記入する。 1 始めの会	・身だしなみを自分で確認するために、項目をチェック式にした作業日誌を用意する。 ・(G) リーダーとして、自信をもち、会を進めるために、会次第カードを用意する。	作業日誌 会次第
50	2 製品づくり ○道具を準備する ○今日の目標を立て、カードに書く。(頑張りカード) ○成型 ①たたらを伸ばす ※丸皿・角皿・豆皿共通 〈丸皿〉(G) T1 (D) T2 ②粘土を丸形に切る ③粘土を型に合わせる ④型通りに弓で粘土を切る 〈角皿〉(C) T2 ②粘土を型に合わせる ③線の通り弓で粘土を切る。 〈豆皿〉(M) T1 ②粘土を丸形に抜く ③粘土を型に合わせる 〈カップ〉(F) T3 ②泥しょう粘土を混ぜる ③泥しょう粘土を型に流す	・作業を始める前に、本時の目標を確認するため、担当教師と話し合う時間を設ける。 ・目標を意識して作業できるように、目標が書かれたカード(頑張りカード)を作業台の上に置くように指示する。 ・(M) 集中して自分の作業に取り組めるように、パーティションを使用する。 ・(F) 体力や体調を考慮し、カップを1つ製作したら、5分間の休憩時間を設ける。 ・(G) 作業終了の時刻に気付けるように、作業時間をカウントダウンするタイマーを用意する。 ・(G) 自信をもち、全体に声を掛けられるように、作業終了時に全体に話す言葉をカードで示す。	頑張りカード 粘土板 たたら板 麵棒 布 雑巾 弓 ろくろ など タイマー カード
20	3 片付け・掃除	・次の活動に気付き、自分たちで判断して掃除に取り組めるように、掃除の手順を掲示する。	掃除の手順表
10	4 作業日誌を記入する ・頑張りカードを作業日誌に貼る。 ・今日の振り返りを作業日誌に記入する。	・今日の作業を自分で振り返ることができるように、項目をチェック式にした作業日誌を用意する。 ・今日の振り返りを教師と共有し、次回の目標を立てるために、教師と話し合う時間を設ける。	作業日誌
10	5 終わりの会 ・今日の振り返りを発表する。	・(G) 自信をもち、会を進められるように、会次第を用意する。 ・今日の学習の成果を全員で共有するために、出来上がりの製品を黒板前に提示する。 ・次時に向けての意欲を高めるために、本時の活動を称賛し、次時の作業内容を伝える。	会次第

(5) 評価

- 【生徒】・生徒が道具の正しい使い方や、力加減を意識しながら成型することができたか。
 ・生徒が自分で仕上がり判断し、教師に報告することができたか。
- 【教師】・生徒が本時の目標を教師と共有して活動するための手立ては適切であったか。
 ・生徒が自分で仕上がり判断するための手立ては適切であったか。

4 指導計画と評価規準 (総時数87時間 本時 54・55／87時間)

＜別紙1＞

小单元名（学習活動名）	時数	学習活動に即した評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
1 丸皿・角皿・豆皿・カップの製作 【丸皿・角皿・豆皿】 ・たたき作り ・成形 ・乾燥 【カップ】 ・粘土作り ・型に粘土を流す	57 (本時 54・55 /57)	・形を崩さないように、粘土を扱う。	・粘土の持ち方や扱い方を工夫したり、注意したりする。	・粘土を両手で持つ。 ・力加減に注意して粘土を持つ。	・粘土の性質が分かる。
		・手本と同じように製作しようとする。	・道具の使用の仕方を工夫する。	・道具を正しく使う。	・使用する道具の用途が分かる。
		・カップの製作に関心をもつ。 ・泥しょう粘土を、濃度が均一になるまで混ぜようとする。 ・石こう型に泥しょう粘土を注ぎ入れようとする。	・粘土の濃度を均一にするために、棒で混ぜる。 ・石こう型の線まで泥しょう粘土を入れる。	・棒をゆっくり回しながら動かし、粘土を混ぜる。 ・泥しょう粘土がこぼれないように石こう型に注ぐ。	・カップの使用目的が分かる。 ・粘土の濃度を均一にすることが分かる。 ・泥しょう粘土を、石こう型の線まで入れて、出来上がりが分かる。
		・道具を用意したり、所定の場所に片付けたりする。 ・作業台の上を整理整頓しようとする。	・道具の置き場所が分かる。	・作業台の決められた場所に道具を置く。	・整理整頓することの必要性が分かる。
		・場面に合った言葉遣いや態度をしようとする。	・場面に合った言葉遣いや態度をする。	・丁寧語「～です」「～ですか」という話し方が分かる。 ・教師の近くで報告する。	・丁寧に話す理由が分かる。
		・製品の完成を目指し、作業する。	・手本を見て、工程ごとの仕上がりを判断する。	・手本通りに仕上げるための技能を身に付ける。(切断の仕方、やすり掛けの仕方など) ・手順に沿って角皿を製作する。	

小单元名（学習活動名）	時数	学習活動に即した評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
2 やすり掛け （素焼き前）	6	皿を落とさないように持ち、やすりを掛けようとする。	- やすりを掛ける場所の目印が分かる。 - やすり掛けの仕上がりが分かる。	- 落とさないように皿を持ち、やすりを掛ける。 - 目印が見えなくなるまでやすりを掛ける。 - 円を描くように皿にやすりを掛ける。	やすりを掛ける目的が分かる。
3 釉掛け	6	皿に釉薬をきれいに掛けようとする。	皿を入れる角度を考え、釉薬の容器に皿を入れる。	皿を落とさないように、釉薬ばさみを持つ。	釉薬の名前や仕上がりの色が分かる。
4 やすり掛け （本焼き後）	6	皿をしっかり持ち、やすりを掛けようとする。	やすり掛けの仕上がりが分かる。	効率良くやすりを掛けるための皿の持ち方が分かる。	皿にやすりを掛ける目的が分かる。
5 販売準備・販売会 ・ラッピング ・販売会 ・売上計算	1 2	- 購入する人のことを考えて製品を製作したり、ラッピングをしたりしようとする。 - 場面に合った言葉遣いや態度で販売しようとする。 - 製品の販売数、売上に関心をもつ。 - 次回の販売会や製作に向けて意欲をもつ。	- どのような人が製品を使うかを考える。 - 購入した人がどのように製品を使うかを考える。 - 買いたくなるようなラッピングの仕方を考える。 - 場面に合った言葉遣いや態度について考える。 - どのような製品を作ると使う人が喜んでくれるか、購入してくれるかを考える。	- 値札や製品カードを指定された位置に正確に貼る。 - 場面に合った言葉遣いや態度を知る。 - 販売にふさわしい言葉が分かる。 - 販売数や売上数を数えたり、計算したりする。	- どのような人が購入してくれるかを知る。 - 購入した人がどのように製品を使っているかを知る。 - 場面に合った言葉遣いをする理由が分かる。 - 丁寧に製品を製作することの大切さが分かる。

(2) 生徒の実態と目標 (評価基準) 関：関心・意欲・態度 思：思考・判断・表現 技：技能 知：知識・理解
※本校の生徒が協議での対象の生徒です。

名前	単元に関する実態	単元の目標 (評価基準)	本時の目標 (評価基準)	本時の目標を理解するための 手立てやアプローチ
				本時の目標を達成するための 手立て
D (4年・女) 丸皿	・丸皿作りの道具や工程が分かり、自分で作業を進めている。力加減や弓の当て方などに気を付け、成型している。	・手本とおりに仕上げるために弓の使い方を覚えたり、見本と比べたりして製作する。(関・思・技)	・弓を動かさずに、ろくろを動かして粘土を切断する。(関・思・技)	・弓の使い方やろくろの動かし方について、演示する。
	・各工程が終わった際に、自分の場所から「先生、できました」と報告することができる。仕上がりを教師と一緒に確認している。	・指示された場面で、教師に報告する。(思・知・技)	・自分から教師の近くに移動して報告する。(思・知・技)	・仕上がりを意識できるように、成型した皿の見本を示す。
G (2年・女) 丸皿	・完成までに時間を要するが、丁寧に作業に取り組んでいる。教師の支援を受けて、ろくろを正しい方向へ回したり、弓で粘土を垂直に切断したりする。	・手本とおりに仕上げるために、ろくろを正しい方向に回したり、弓の使い方を覚えたりして、製品を製作する。(関・思・技)	・ろくろを左に回し、弓を動かさずに、粘土を切断する。(関・思・技)	・「教師の近くで報告する」「立ち止まって報告する」の2点について教師と話し合う時間を設ける。
	・粘土の切断後、「切り方はどうですか」の質問に対して、「まっすぐです」と答えることができる。	・手本を見て、工程の仕上がりを判断する。(思・技)	・手本を見て、粘土の切断面を確認してから報告する。(思・技)	・報告のタイミングが分かるように工程表に示す。
				・「教師の近くで報告する」「立ち止まって報告する」の2点について教師と話し合う時間を設ける。
				・報告のタイミングが分かるように工程表に示す。
				・切断前にろくろを回す注意点や弓の位置を教師と一緒に見る。
				・粘土を切断するときの注意点を図や言葉で示す。
				・回す方向を示す矢印をろくろに付ける。
				・完成の手本を用意し、切断面の様子をカードで示す。
				・仕上がりを確認するためのチェック表を用意する。

名前	単元に関する実態	単元の目標（評価基準）	本時の目標（評価基準）	本時の目標を理解するための 手立てやアプローチ
				本時の目標を達成するための 手立て
C (2年・男) 角皿	・石こう型を使用し、皿作りに取り組み、工程や使用する道具を確認しながら製作している。手の感触で粘土の固さを確かめながら、石こう型を使った成型に取り組んでいる。	・手本とおりに仕上げるために砂袋の使い方や力加減を覚えて、成型する。 (関・思・技)	・砂袋の使い方を考え、すき間がないように、粘土を石こう型に合わせ、角皿を製作する。 (関・思・技)	・砂袋の使い方や布の被せ方など見本を示す。
	・自分から教師の近くに行き、報告できる。粘土を伸ばす工程では、自分で出来具合を確認し、報告する。その他の工程については、仕上がりを作業の始めに教師に確認することが多い。	・手本を見て、工程の仕上がりを判断して報告する。 (思・技)	・粘土がすき間なく石こう型に合っているかを確認してから報告する。 (思・技)	・成型の際の道具の使い方を確認できるように、砂袋の当て方や布の被せ方をカードで示す。
M (2年・男) 豆皿	・型を使用し、丸形に粘土を切断することができる。型が抜けないと、同じ場所に何度も型を押し、仕上がりが悪くなることがある。	・抜き型を正しく使い、力加減に注意し、粘土を丸形に抜く。 (関・思・技)	・力を入れて、抜き型を粘土に押し込み、粘土を丸形に抜く。 (関・思・技)	・作業開始前に言葉掛けをしたり、注意点を示したカードを提示したりする。
	・たたら伸ばしでの報告が定着してきており、自分から教師に報告する場面が増えてきた。	・指示された場面で、教師に報告する。 (思・技)	・一工程が終了したら、教師に報告する。 (思・技)	・抜き型に力を入れやすいように、補助板を用意したり、「ぐっ」と声を掛けたりする。
F (2年・男) カップ	・石こう型へ粘土を注ぎ入れることが分かり、集中できると意識して型に粘土を注ごうとする。服薬の影響で眠気が出ることもある。	・カップの成型をすることが分かり、自分で石こう型に粘土を注ぎ入れる。 (関・思・技)	・石こう型の注ぎ口を意識して、粘土を注ぐ。 (関・思・技)	・報告する場面を知るために、教師と一緒に工程表の「確認」の文字や絵を見る。
				・工程表に報告する場면을提示する。 ・一工程が終了したら、報告することを伝える。
				・製作前に、空のカップで注ぎ口に注ぐ練習を一緒にする。
				・注ぎ口が分かるように、注ぎ口の周りに色を付ける。 ・「見ます」と声を掛け、注ぎ口を指さす。

Ⅲ 高等部

卒業後の生活に向けて、自分で考え行動する力を
育む職業科・生活単元学習（進路）の授業実践

～合理的配慮の視点に基づいた評価システム作りと
教師の手立ての工夫～

Ⅲ 高等部について

1 高等部の研究テーマ

卒業後の生活に向けて、自分で考え行動する力を育む職業科・生活単元学習（進路）の授業実践

～合理的配慮の視点に基づいた評価システム作りと教師の手立ての工夫～

2 研究テーマの設定理由

(1) 生徒の実態

高等部は、1年生15名、2年生8名、3年生15名、計38名の生徒が在籍している。身辺自立している生徒から肢体不自由を併せ有する生徒、日常生活全般で支援が必要な生徒まで様々な実態の生徒が在籍する。コミュニケーション面では、言語以外の方法で意思を表す生徒もいるが、言語によるやり取りが可能な生徒が多い。

平成27年度の研究では、「共に働く生徒像（育てたい生徒像）」に基づいた作業学習の授業実践を進める中で、生徒同士のやりとりが多く見られ、お互いを意識し、高め合う様子が見られるようになった。また、経験者である上級生を目標にして、作業に見通しをもって取り組む様子や、お互いの技能や製品作りの上での態度を認め合う様子も見られた。

(2) 職業科、生活単元学習（進路）における生徒の実態

本校は2年次から、選択コース制（職業学習コース、職業・生活学習コース）を実施している。

1年生は、2年次のコース選択・決定に向けて、進路学習に取り組んでいる。自己理解を深め、友達や上級生、家族など身近な人との関わり大切さを学び、卒業後の生活について考える学習を展開している。

前期・後期実習や木曜実習【注1】、アンテナショップ【注2】の運営やボランティア活動等、地域での学習に定期的・継続的に取り組むことで、職業生活をする上で必要な知識を身に付けたり、担当する仕事に責任をもって取り組んだりすることができるようになってきている。また、学校生活や家庭生活の中で、自分の課題を見付け、その解決に向けて何をすべきかを意識して過ごそうとする様子も見られるようになってきている。しかし、まだ自分の良さが何なのか、また課題解決に向けて自分が何をすべきなのか理解できずにいる生徒も多い。

そこで今年度は、生徒と教師が課題や目標を共通理解し、同じ方向に向かって取り組めるようにはたらくノート（教師間で情報を共有するためのノート）と振り返りカード等（教師・生徒・保護者間で情報を共有するためのカード等）を関連付けて活用していく。合理的配慮の視点から、生徒の意思表示を受け取り、その内容を生徒と共に検討した上で合意形成をし、実施する。さらに、評価規準に沿った評価項目を検討し、振り返りを行えるよう、振り返りカード等の内容を検討・改善していく（PDCAサイクル）。それぞれの活動を丁寧に振り返り、自分を見つめ直すことで、生徒が自分の良さや課題に気付いたり、課題に向けて何をすべきなのか目標をもって取り組んだりする姿が期待できると考える。

【注1】 職業コースで毎週木曜日に行う現場実習。

【注2】 職業・生活学習コースで月2回、イオンスーパーセンターとビフレに出店しているアンテナショップへ行き、製品の補充やちらし配り、販売を行う。

3 研究仮説

職業科、生活単元学習（進路）において、はたらくノートと振り返りカード等を活用することで、生徒は自分の良さや課題が分かり、次の活動に向かって明確な目標をもって取り組めるようになる。

4 研究の内容・方法

（１）生徒と教師の共通理解のための評価システム作り

- ①はたらくノート（職員間での共通理解のためのツール）の活用
- ②振り返りカード等（教師と生徒間の共通理解のためのツール）の活用
- ③教師の手立ての工夫（ビデオの活用、ロールプレイなど）

（２）単元の設定と評価規準・評価基準の設定

- ①単元計画・小単元の設定
- ②単元の評価規準の設定
- ③生徒個々の評価基準の設定

5 研究計画

【１年次】

- （１）生徒が気付きや実感を発信し、教師が正しく受信できるような振り返りカード等の作成
- （２）はたらくノートと振り返りカード等をツールとした評価システム作りと授業実践

【２年次】

はたらくノートと振り返りカード等をツールとした評価システムの在り方についての検討を通して授業実践を行い、１年次で明らかになった課題を改善する。

年間計画

期日	研究会等	内容等
５月１２日（木）	学部研究についての話し合い	学部研究の方向性について
６月２日（木）	学部研究会①	学部研究の方向性について決定
７月１日（金） ２校時	学部授業研究（兼 日々の授業協議）	高等部３年職業科：木曜実習の振り返り…抽出生徒３名
７月１日（金）	学部研究会②（兼 日々の授業協議）	指導案検討等
夏季休業中	指導案作成（高等部２年生活単元学習）	
８月２３日（火）	学部研究会③	指導案検討等
９月７日（水）	学部授業研究会（事前研）	高等部２年生活単元学習：学年進路
９月２１日（水）	全校授業研究会①（高等部）	高等部２年生活単元学習：学年進路
１０月２０日（木）	改善案を受けての授業（高等部２年生活単元学習）	
１１月１日（火）	学部研究会④	
１１月４日（金）	全校授業研究会②（小学部）	
１１月２５日（金）	全校授業研究会③（中学部）	
１２月１日（木）	学部研究会⑤	

冬季休業中	今年度の取り組みについてのアンケート実施	
1月23日(月)	学部研究会⑥	今年度の成果と課題について
2月2日(木)	学部研究会⑦	
2月21日(火)	研究全体会③	
3月8日(水)	学部研究会⑧	次年度に向けて

6 研究の実際

(1) 学部研究の内容

①生徒と教師の共通理解のための評価システム作り

	職業学習コース	職業・生活学習コース
ア はたらくノートの活用 (職員間での共通理解のためのツール) (P46, 47 参照)	・ 木曜実習終了後、担当教師が記入 →職員室にて担当職員で回覧 ・ 次週の作業学習の時間に生徒が持参し、作業担当教師によるチェックと相談、作業学習の様子を記入 ・ 生徒が実習担当教師へ返却	・ アンテナショップ終了後、担当教師が記入 →職員室にて担当職員で回覧 ・ 次週の作業学習の時間に生徒が持参し、作業担当教師によるチェックと話し合い、作業学習での様子を記入 ・ 生徒がアンテナショップ担当教師へ返却
イ 振り返りカード等の活用 (教師と生徒間の共通理解のためのツール) (P48, 49 参照)	・ 実習後の、生徒自身による振り返りカードへの記入 ・ 他の生徒によるアドバイスカード(ビデオ検証時) ・ 次の実習の目標作成のための個別相談(※はたらくノートを引用して)	・ 各作業班への作業製品依頼書の作成・配布 ・ アンテナショップ後の、生徒自身による振り返りカードへの記入 ・ 他の生徒によるアドバイスカード(ビデオ検証時) ・ 次のアンテナショップの目標の記入(※はたらくノートを引用して)
ウ 教師の手立ての工夫	・ 振り返りの時間のビデオ検証 ・ 次の実習に向けての目標作成への話し合い ・ ロールプレイ(生徒同士で一つの課題に取り組み、望ましい対応を探る)	・ 振り返りの時間のビデオ検証 ・ 次のアンテナショップの目標作成のための個別相談 ・ ロールプレイ(生徒同士で一つの課題に取り組み、望ましい対応を探る)

②単元の設定と評価規準・評価基準の設定

ア 単元計画・単元設定

- ・ アンテナショップの単元計画、小単元の設定

イ 単元の評価規準の設定

- ・ 小単元に対する評価規準の設定

ウ 生徒個々の評価基準の設定

- ・ 小単元ごとの評価規準をもとにした生徒個々の評価基準の設定

(2) 授業実践<P50～P53 参照>

7 成果と課題

(1) 成果について

①はたらくノートの活用

はたらくノートには、木曜実習での担当職員の評価や巡回指導時の様子、アンテナショップでの様子を担当者が記録した。それを関係職員間で回覧することにより、はたらくノートをツールとして情報共有することができた。教師間で生徒の成果や課題、次時の目標を共通理解し、生徒に必要なポイントを絞って、作業学習や職業科、進路学習、学級での学習等で指導することができた。

②振り返りカード等の活用

次の実習等への目標を立てる際、振り返りカードをツールとして生徒と教師の目標の方向性を合わせる時間を設けることで、同じ目標に向かって取り組めるようになった。また、生徒同士のアドバイスカードを取り入れることで、生徒が互いの良さを認め合い、さらに友達からのアドバイスを受け入れ、次の実習等へ生かすことができた。

はたらくノートで他者評価を行い、振り返りシートで自己評価をすることで、互いの評価を共通理解し、次の目標設定に生かすことができた。

③教師の手立ての工夫（P50～P53の学習指導案参照）

○ビデオでの振り返り

- ・ビデオを活用することにより、活動の様子を自分で振り返ることができ、さらに友達活動の様子を見ることで自分に置き換えて振り返ることができた。また、場面の切り取りや字幕の挿入など、提示方法を工夫することで教師が意図するポイントに生徒が自ら気付く授業実践ができた。



○ロールプレイ

- ・自己の課題や次回の目標を文字や言葉だけでなく、ロールプレイを通して確認する時間を設けた。時間を長く設定し、その場面を評価する生徒も設定するように授業改善をしたことで理解が深まり、次の実習やアンテナショップでの活動にも生かすことができた。



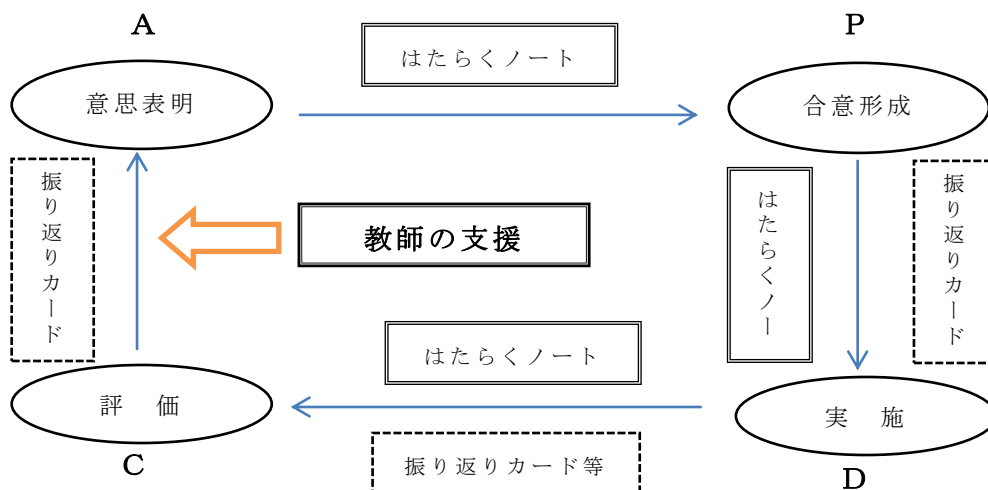
○ポイントを絞った授業

- ・ビデオを見る視点や授業のねらいなど、ポイントを絞った指導を行うことで、その授業で何を学んだのかが明確になった。また、授業前後で生徒の変化が顕著にみられるようになった。

④評価のサイクル（評価システムの構築）

事前学習→木曜実習等（はたらくノート）→振り返り（振り返りカード、アドバイスカード）のサイクルで繰り返し学習する機会を設けることで、生徒同士で授業を進め、生徒自身が次のステップへと向かう目標を設定することができるようになった。

小単位ごとの観点に沿った評価規準を設定することができた。さらに、評価基準を設定することで生徒の目指す姿が具体化でき、生徒の目標設定に生かすことができた。



(2) 課題について

① はたらくノートの活用

保管方法や手渡し方法について、学部内で共通理解している活用方法を基本とするが、個人の実態に応じた方法の検討をしていく必要がある。

② 振り返りカード等

課題改善に重きが置かれがちだが、自分の良さを認めたり、良いところを伸ばしたりすることを基本に活用していく。

生徒の実態や成長、教師のねらいに応じて、カードの評価項目等の内容を改善していく必要がある。

③ 教師の手立ての工夫

なぜアンテナショップを運営するのか、なぜ笑顔で接客しなければならないのかなど、意味付けをしてから、指導していく必要がある。

単元でどんなことを学習していくのかを、生徒に分かるように単元計画を廊下等に掲示するべきである。

アドバイスカードは、記入してアドバイスするだけでなく、課題や目標を生徒全員で共有した方がよい。また、次回の課題について、教師が介入したり、アドバイスを受けた後に自分の考えを発表したりする時間も設定する必要がある。

④ 評価規準の設定

アンテナショップの小単元を細分化し、それに伴って評価規準も設定していく必要がある。

(3) 来年度に向けて

○今年度の取り組みの継続

- ・ はたらくノートと振り返りカード等の活用方法（評価システム）の確認や見直し、継続
- ・ 教師の手立ての工夫（ビデオ等の視覚的教材の活用、目標作りのための相談、ロールプレイの活用など）
- ・ 職業・生活学習コースの年間計画とアンテナショップの単元構成の見直し

高等部研究テーマ

卒業後の生活に向けて、自分で考え行動する力を育む職業科・生活単元学習（進路）の授業実践

～合理的配慮の視点に基づいた評価システム作りと教師の手立ての工夫～



「木曜実習や地域活動での」（来年度の原案として）

＜別紙＞ はたらくノートの 記入方法



B 6 サイズで持ち運びしやすい
サイズのファイル

☆木曜実習… I 期からIV期
までの目標を入れる。
☆アンテナショップ…振り
返りカードで、教師と共通
理解して立てた目標を記入。

☆木曜実習やアンテナショ
ップでの様子を担当者が記
入する。

☆担当が良いところや頑
張ってほしいところなどを
記入。

☆担任や作業担当が上記の
評価を受けて、学級や作業学
習、家庭での様子を記入。

※担任や作業担当、その他
の活動で関わっている教師
で回覧し、共通理解をして
日々の指導に当たる。

「はたらく」記録用紙
年 月 日 ()

活動名: _____
氏 名: _____

本人の目標 (期)
・
様子

本人の目標 (期)
・
様子

メモ (良いところ・頑張っているところなど)

その他 (学級や作業学習、家庭での様子など)

記入者	閲覧者		
	作業	担任	その他担当者

＜別紙＞
はたらくノートの
記入例

「はたらく」記録用紙

年 11 月 24 日 (木)

活動名: イオン
氏名:

本人の目標 (期)

・ 仕事の流れを覚える

様子 仕事の流れは大分覚えた。入店管理も一人で書くことができた。また次にやる仕事を勝手に判断して動いてしまった。かかった。

本人の目標 (期)

様子

メモ (良いところ・頑張って
よかった。ちらし配り。

その他 (学習や作業学習、家

記入者

閲覧者

「はたらく」

活動名: イオン
氏名:

本人の目標 (期)

・ 仕事の流れを覚える

様子 率先して仕事をや
りながらやること

本人の目標 (期)

・

様子

アンテナショップ
での様子を受けて、
作業学習でも担当間
で共通理解をしなが
ら様子観察をしたり
相談や指導をしたり
する。

「はたらく」記録用紙

年 月 日 (水)

活動名: イオン

氏名: _____

本人の目標 (期)

- ・ 仕事の流れを覚える

様子: 率先して仕事を任せて、_____さんと相談しながら進めることができた。

本人の目標 (期)

- ・

様子: _____

メモ (良いところ・頑張っているところなど)

作業...し、グリーティング、お客さんに呼びかけをしていた。

その他 (学級や作業学習、家庭での様子など)

学校では先生に教わっていることも多い、他の生徒の迷惑はきかずに、勝手に進んでいく。(先生等)

記入者

佐々木

閲覧者

作業

(印)

振り返りカードで
振り返ったり、友達
からアドバイスを
もらったりすること
で、次のアンテナ
ショップでは友達と
相談しながら進める
ことができた。

「はたらく」記録用紙

29年 2月 2日 (木)

活動名: アンライオン

氏名: _____

本人の目標 (1期)

・商品の陳列を工夫する

様子

製品が少なかったため並べるのにすごく時間がかかったが、少しの工夫をすることで、きれいに並べた。

本人の目標 (2期)

・

様子

メモ (良いところ・頑張ってほしいところなど)

・教員が指示を出さなくてもテキパキと仕事を進めていた。

その他 (学級や作業学習、家庭での様子など)

・朝、早く起き、15分より早くに学校に来るようになった。

記入者



閲覧者

作業 	担任 	その他担当者 	
--	--	--	--

さらに振り返りを行ってから
次のアンテナショップに向かう
ことで、少しのヒントでできる
ようになったり、教師の指示が
なくても仕事を進められるよう
になったりと、ステップアップ
している様子が伺える。

<別紙> 振り返りカードの 記入方法

月 日 ()		第 回目	
【実習から実習先へ】			
①		評価 (A/B/C)	
②		自分	担当者
よくできた・◎ できた・○ もう少し・△		自分	担当者
1	業務入や準備を、スムーズにやり、正しいにできたか。		
2	自分から進んで業務に取り組むことができたか。		
3	あいさつ、言葉、正しい言葉づかいをすることができたか。		
4	準備や後片付けを自分からできたか。		
5	話をよく聞いて行動することができたか。		
6	分からないことを自分から進んで聞くことができたか。		
7	まちがいや失敗を素直に認めることができたか。		
8	メール・電話をかわける、用紙確認をする等、職員とコミュニケーションをとれたか。		
9	仕事の進捗を覚えておくことができたか。		
10	職員を円滑にできるように気をつける、手際よく作業を進めることができたか。		
11	長時間、集中力を維持して作業に取り組むことができたか。		
【今日の反省】			
【実習先から】			

①②は事前に記入。

☆木曜実習…実習後、本人と実習先の担当者の
評価、コメントを記入。

☆アンテナショップ…本人と担当者の評価、
コメントを記入。

①②③は事前に記入。

☆木曜実習…実習後、家で記入。
その際、帰着電話での担当者からの
アドバイス（実習先からの評価も）
を参考にする。

☆アンテナショップ…学校へ戻っ
てから記入。その際、担当者とも相
談しながら記入する。

木曜実習 振り返りシート	
氏 名	
実習日	①
実習内容	②
実習の目標 (日誌から)	③
成 果	
課 題	
次に向けて	
その他	

※成果、課題、次回に向けては、実習先で職員の指導に教えてもらったことや
アドバイスをいただいたこと、学校への帰着電話で担任と話したこと等を踏ま
えて記入し、振り返りがしやすいようにしてください。

さんへのアドバイスor感想
より

☆振り返りの授業の中で、ビデオを観たり、
担当者からの評価を聞いたりしてから友達へ
のアドバイスカードへ記入。それを発表し合
って話し合い、次への目標立てに生かす。

<別紙> 振り返りカードの 記入例

木曜実習 振り返りシート

氏名 []

実習日	2月2日
実習内容	アイロン
実習の目標(日誌から)	指示を聞きながら作業を覚えていく。アイロンをかける練習をする。
成果	アイロンをかけることができた。
課題	アイロンをかける時に、アイロンをかける順番がわからない。

さんへのアドバイスor感想

作業の順番がわからないので、次回からは、アイロンをかける順番を確認しよう。

指示を聞きながら取り組んでいたが、途中でやり方を間違えたので、次回は「確認をこまめにする。」という自分なりの目標を立てた。振り返りで友達から「メモを取るといい。」というアドバイスをもらい、目標を変えた。

2月9日(水) 第29日目

【家庭から実習先へ】
お返事をありがとうございます。大変お世話になっております。今後ともよろしくお願いいたします。

【今日の目標】
指示を聞きながら作業を覚えていく。アイロンをかける練習をする。

	評価(A B C)	
	自分	担当者
よくできた: ◎ できた: ○ もう少し: △		
1 着替えや準備。一人ですばやく、ていねいにできたか。	○	◎
2 自分から進んで実習に取り組むことができたか。	○	◎
3 あいさつ、丁寧、正しい言葉づかいをすることができたか。	○	◎
4 準備や後始末を自分からできたか。	○	◎
5 話をよく聞いて行動することができたか。	○	◎
6 分からないことを自分から進んで聞くことができたか。	○	◎
7 まちがいや失敗を素直に直すことができたか。	○	◎
8 ルール(服装を合わせる、再度確認をする等)を守り、職員とコミュニケーションをとれたか。	○	◎
9 仕事の内容を覚えて学ぶことができたか。	○	◎
10 製品を汚さないように気をつけながら、丁寧に作業を進めることができたか。	○	◎
11 8時間、集中力を維持して作業に取り組むことができたか。	○	◎

【今日の反省】
アイロンをかける順番がわからないので、次回からは、アイロンをかける順番を確認しよう。

【実習先から】
アイロンをかける順番がわからないので、次回からは、アイロンをかける順番を確認しよう。

「メモを取ってから取り組んだので、途中でやり方を忘れても正しいやり方に直すことができた。」という本人の振り返りに加え、実習先からも「メモを取っていたためスムーズに作業していたようだ。」という評価をもらった。

木曜実習 振り返りシート

氏名 []

実習日	2月9日
実習内容	アイロン
実習の目標(日誌から)	指示を聞きながら作業を覚えていく。アイロンをかける練習をする。
成果	アイロンをかけることができた。
課題	アイロンをかける時に、アイロンをかける順番がわからない。

さんへのアドバイスor感想

作業の順番がわからないので、次回からは、アイロンをかける順番を確認しよう。

友達からのアドバイスを受け入れて取り組み、スムーズに作業ができたという成果につながった。

高等部 2 年 職業・生活学習コース A グループ 生活単元学習 学習指導案

日 時 平成 2 8 年 9 月 2 1 日 (水)
3 校時 1 0 : 3 0 ~ 1 1 : 2 0
場 所 高等部 2 年 A 組教室
指導者 佐々木 顕

1 単元名

アンテナショップを運営しよう

2 単元目標

- (1) 在庫確認、製品の補充、ちらし配り、販売活動等アンテナショップの仕事を覚え、アンテナショップ運営で工夫できることを考える。(考える力)
- (2) アンテナショップの一連の学習活動の中で自分の良いところや課題を見つけて、改善しようとする。(考える力)
- (3) 路線バスを利用していろいろな場所への移動の仕方を覚える。(生活する力)

3 生徒と単元

(1) 生徒について

本学習グループは職業・生活学習コースの男子 1 名、女子 2 名の 3 名からなる学習グループである。3 名とも身辺自立はほぼできており、教師や友達とのコミュニケーションをスムーズにとることができる。

職業観については、「人の役に立ちたい」「働かなければならない」「お金がほしい」等様々であるが、卒業後に「働きたい」という気持ちはそれぞれもっている。卒業後の進路については、職業に関する知識がまだ十分ではないものの「雑貨を作る仕事をしたい」「介護の仕事に就きたい」等少しずつ将来の仕事について具体的なイメージをもち始めている。6 月に行われた前期実習では、3 名とも福祉サービス事業所での現場実習に赴いており、自分の得意なところやこれからの課題に気付くことができた。

放課後や休日等の余暇時間の過ごし方については、家の中で過ごしたり、家族と出かけたりとそれぞれであるが、3 名とも一人で公共の交通機関を使って出掛けるということには慣れていない。

(2) 単元について

本単元は、イオンスーパーセンター湯沢店、ビフレ湯沢店、道の駅うご端縫いの郷内に outlets している本校のアンテナショップの運営が主な学習活動である。月 2 回 (第 1、4 木曜日) 実際にアンテナショップへの校外学習に出向き、在庫確認、製品の補充、ちらし配り、販売活動等を行っている。10 月までは 2、3 年生合同で活動するが、それ以降は本グループの 2 年生 3 名のみで活動することになる。

これら一連の校外での活動を通して、校内での活動とは違う緊張感をもって活動に取り組むことができる。また、校内での製品補充の活動を含めたアンテナショップ運営の一連の学習活動を行うことで自分達でアンテナショップを運営しているという実感をもち、仕事に対する責任感をもちることができるのではないかと考える。また、その中で自分の得意なことを伸ばしたり、課題となることを解決したりする機会も設定できると考える。

一部スクールバスを利用している生徒もいるが (路線バスでの移動に切り替える予定)、アンテナショップへの校外学習のときは、自宅から現地まで自力で登校することにしており、なるべく生徒だけで徒歩や路線バス利用で移動している。路線バスで移動できるようにバスの乗降、運賃の支払い、乗り換え等を通して路線バス利用に慣れ、自力で移動できる範囲が少しずつ広がればと考える。

以上のような活動を通して、職業生活において課題となることに気付いて改善したり、路線バスを利用した移動に慣れ行動範囲を広げたりしながら進路や職業について

考えたり学んだりすることができると考え本単元を設定した。

(3) 指導にあたって

- ・生徒同士が関わり、主体的に学習活動に取り組めるように、仕事の手順ややり方を3年生が取り組む姿を見て覚えたり、分からないことを3年生に聞いたりする機会を設定する。
- ・自分の考えをまとめたり、友達に伝えたりすることができるように、学習活動に適したワークシートやアドバイスカードを準備する。
- ・目的意識をもってアンテナショップの校外学習に行けるように、必ず前日までに目標を立てる機会を設ける。
- ・アンテナショップでの校外学習で課題を意識できるように、学校に帰着後に活動を振り返る。また、適宜テーマを設けて、課題を見つけたり、話し合ったりする機会を設ける。
- ・生徒の課題を教師同士で共通理解できるように、課題や校外学習での様子について「はたらくノート」に記入して教師間で情報共有する。
- ・校外学習での振り返りや、次回の校外学習の目標設定ができるように、振り返りシートを用意する。
- ・路線バスの利用に慣れるように、少しずつ教師が同行する距離を減らすようにする。
- ・路線バスの乗り方を覚えられるように、整理券の見方や両替の仕方について適宜学習する。

4 指導計画と評価規準 <別紙1>

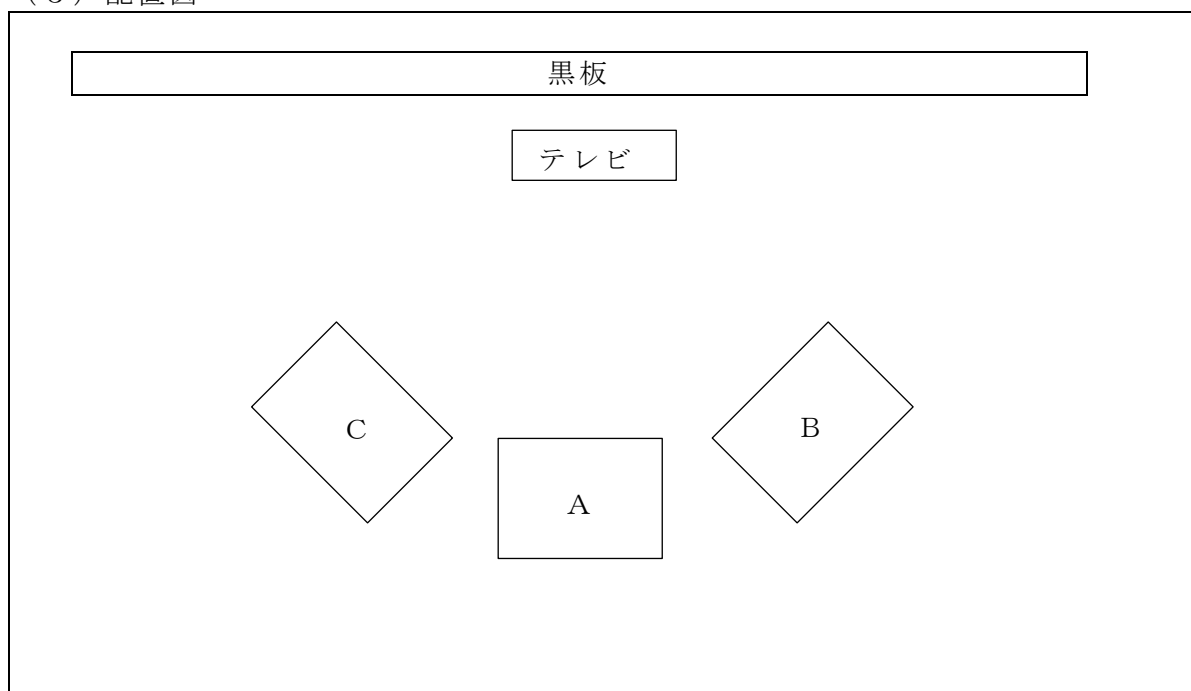
5 本時の計画

(1) 目標

- ・友達がちらし配りをする様子をビデオで見てアドバイスしたり、友達からのアドバイスを聞いて次回への目標を立てたりする。(考える力)
- ・友達と話し合いながら話す順番を決めたり、ロールプレイをしたりして学習活動を進め、ちらし配りの仕方を覚える。(人と関わる力)

(2) 児童(生徒)の実態と目標(評価基準) <別紙2>

(3) 配置図



(4) 展開

時間	学習活動	支援上の留意点及び手立て	準備物
5 分	1 本時の学習について確認する。 ○今日の目標 ・友達のいいところや課題を見つけよう ・次に頑張ることを考えてみよう	・学習の流れや「今日の目標」が分かるように、学習の流れや目標を掲示する。 ・話し合い等の学習活動がスムーズに進められるように、学習のルールを確認する。また、お互いの顔を見て話し合えるように、席の配置を工夫する。	フラッシュカード(今日の目標、学習の流れ)
25 分	2 ちらし配りの活動を振り返る。 ①ビデオを見る。 ②アドバイスカードに気付いたことを記入する。 ③気付いたことやアドバイスを発表する。 ①～③を3名分繰り返す。	・(A、B) 良かったところや課題となるところを見つけることができるように、ポイントとなるような観点をいくつか示す。 ・ビデオで聞き取れなかったり、伝え切れなかったりするところがある場合は、教師が補足する。 ・アドバイスカードに記入する活動時間が分かるように、タイムタイマーをセットする。 ・生徒たち自身で振り返りを進められるように、教師はなるべく指示を出さずに、うまくできたところを称賛するだけにする。 ・課題からアドバイスを導いたり、友達からのアドバイスから自分の課題に気付いたりできるように、矢印を付ける等してアドバイスカードや振り返りシートを工夫する。 ・生徒達から出なかった良かったところや課題となるところがあったら、教師が付け加える。	振り返りシート アドバイスカード テレビ パソコン タイムタイマー
20 分	3 自分の次回の目標について発表する。 ・振り返りシートに次回の目標をまとめる。 ①自分の次回の目標を発表する。 ②ちらし配りのロールプレイをする。 ③友達や教師から感想を聞く ①～③を3名分繰り返す。	・振り返りシートに記入する活動時間が分かるように、タイムタイマーをセットする。 ・(A) 発表の仕方が分かり自信をもって発表できるように、一番最後に発表するようアドバイスする。 ・(B、C) 生徒の課題改善に向けたちらし配りができるように、教師もスタッフを演じてロールプレイに参加する。	

(5) 評価

- 【生徒】・友達からアドバイスを受けたり、ワークシートにまとめたり、ちらし配りのロールプレイをしたりして自分の次回の目標を見つけることができたか。
- 【教師】・それぞれの生徒が自分の次回の目標に気付けるように教材が工夫されていたか。
- ・生徒たち自身で振り返りを進められるような教師の支援であったか。

4 指導計画と評価規準 (総時数82時間 本時 24/82時間)

<別紙1>

小单元名 (学習活動名)	時数	学習活動に即した評価規準			
		関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
1 アンテナショップについて知ろう ・仕事の流れ ・路線バス利用	10	・アンテナショップの運営に興味をもち、自分から調べたり、先輩に質問したりする。	・アンテナショップの学習活動の自分の目標を考え、発表する。	・自宅・アンテナショップ間、アンテナショップ・学校間の路線バスでの移動の仕方を覚える。	・アンテナショップで在庫確認、製品の補充、ちらし配り、販売活動の仕事を大まかに覚える。
2 アンテナショップでやってみよう ・店舗職員への挨拶 ・在庫確認・製品補充 ・ちらし配り ・販売活動 ・路線バス利用	50 (本時14/50)	・アンテナショップ運営の活動に自分から進んで取り組む。 ・校外学習の事後学習で友達と話し合いながら話す順番を決めたり、ロールプレイをしたりして学習活動を進める。 ・積極的にお客さんに声を掛けたり、ちらしを配ったりする。	・友達にアドバイスしたり、友達からのアドバイスを聞いて次回への目標を立てたりする。 ・アンテナショップ運営の活動で、自分や友達の得意なことや課題が分かる。 ・商品棚の状況を見て整理したり掃除したりする。	・店舗職員への挨拶の仕方を覚える。 ・ちらしの配り方の仕方を覚える。 ・商品の説明の仕方等基本的な販売活動の方法を覚える。 ・路線バスの運賃を調べたり、路線を調べたりして様々な場所に移動する。	・在庫確認から製品補充までの仕事の流れややり方を覚える。 ・様々な場所の路線バスの運賃や移動先までの路線が分かる。
3 アンテナショップを工夫してみよう ・販促活動 ・商品の流通	22	・アンテナショップでの作業学習製品の売り上げに興味をもち、売り上げの傾向が分かる。	・本校のアンテナショップの課題やアイデアを考え、発表する。	・路線バスを利用しての移動に慣れる。	・アンテナショップの運営を通じて商品流通の流れが分かる。

＜別紙２＞

(２) 生徒の実態と目標 (評価基準) 関：関心・意欲・態度

思：思考・判断・表現

技：技能

知：知識・理解

名前	単元に関する実態	単元の目標 (評価基準)	本時の目標 (評価基準)
A (女)	・アンテナショップ運営の仕事の流れが大まかに分かってきているが、大きな声でお客さんに挨拶したり、商品説明をしたりすることに苦手意識がある。 ・回数券を使って路線バスで登下校しており、自宅・学校間は自力での通学に慣れている。	・アンテナショップでの仕事を覚え、大きな声でちらし配ったり、販売活動をしたりする。＜思・知＞ ・アンテナショップの一連の学習活動の中で自分の良いところや課題が分かる。＜思・知＞ ・整理券から運賃を調べたり、両替したりして路線バスを利用する。＜技・知＞	・友達がちらし配りをする様子をビデオで見て、良かったところや課題となるところを見つけたり、アドバイスしたりする。＜関・思＞ ・友達からアドバイスを受け、ちらし配りの自分の課題が分かり、適切なちらし配りの仕方を覚える。＜思・技＞
B (男)	・まだ不安なところもあり、自分からはなかなか活動に取り組もうとしないが、アンテナショップ運営の仕事の流れが分かってきている。 ・自転車や回数券を使っの路線バス登下校に慣れており、通学以外の路線に関しても利用する意欲がある。	・アンテナショップでの仕事を覚え、自分から率先して活動に取り組む。＜思・知＞ ・アンテナショップの一連の学習活動の中で自分の課題を見つけて、改善しようとする。＜思・知＞ ・整理券から運賃を調べたり、両替したりして路線バスを利用する。＜技・知＞	・友達がちらし配りをする様子をビデオで見て、良かったところや課題となるところを見つけたり、アドバイスしたりする。＜関・思＞ ・友達からアドバイスを受け、ちらし配りの自分の課題が分かり、適切なちらし配りの仕方を覚える。＜思・技＞
C (女)	・アンテナショップの学習活動を一通り経験しており、先輩や友達の様子を見ながら一緒に取り組む。 ・まだ、苦手意識があるものの、路線バスを利用して何度か下校したり、実習の通退勤をしたりしたことがある。	・アンテナショップで在庫確認、製品の補充、ちらし配り、販売活動の仕事を感じる。＜思・知＞ ・アンテナショップの一連の学習活動の中で自分の課題を見つけて、改善しようとする。＜思・知＞ ・路線バスを利用したの移動の仕方を覚える。＜技・知＞	・友達がちらし配りをする様子をビデオで見て、良かったところや課題となるところを見つけたり、アドバイスしたりする。＜関・思＞ ・話し合いを進行しながらみんなの意見を聞いたり自分の意見を発表したりする。＜関・思＞

児童生徒個々の評価基準と評価（単元）

高等部2年A組 氏名 A

指導の形態 生活単元学習 単元名 アンテナショップを運営しよう					
単元の目標 ・アンテナショップでの仕事を覚え、自分から率先して活動に取り組む。 ・アンテナショップの一連の学習活動の中で自分の課題を見つけて、改善しようとする。 ・整理券から運賃を調べたり、両替したりして路線バスを利用する。					
児童生徒の年間目標 ・実習や職場見学など体験的な活動を通して、自分が得意なこと、苦手なことを知り、高等部卒業後の生活について考える。					
評価基準	評価・エピソードなど	関	思	技	知 観察方法
・アンテナショップの学習活動の自分の目標を考え、発表する。	・アンテナショップの学習活動の自分の目標を考え、発表する機会を設けた。「仕事をしっかり覚えて、作業学習製品をアピールする」という目標を立てて発表できた。教師が「挨拶はどうするの」と聞いたところ、「大きな声で挨拶する」という目標を付け加えた。 （評価6月27日）		○		発表
・アンテナショップで在庫確認、製品の補充、ちらし配り、販売活動の仕事を大まかに覚える。	・先輩たちが活動している写真を見たり、教師の話を聞いたり、ワークシートで仕事の流れを確認したりした。「ちらし配り」に関してはイメージがもてたようだが、在庫確認、製品補充に関しては「まだよく分かりません」という返答があった。 （評価6月29日）				○ 観察
・自宅・アンテナショップ間、アンテナショップ・学校間の路線バスでの移動の仕方を覚える。	・ワークシートを使って路線バス乗車場所、降車場所、運賃等を確認した。不安そうな様子が見られたが、授業の最後に確認したところ、間違わずに答えることができた。 （評価6月29日）			○	○ 観察
	（評価 月 日）				

児童生徒個々の評価基準と評価（単元）

高等部2年A組 氏名 B

指導の形態 生活単元学習 単元名 アンテナショップを運営しよう					
単元の目標 ・アンテナショップでの仕事を覚え、自分から率先して活動に取り組む。 ・アンテナショップの一連の学習活動の中で自分の課題を見つけて、改善しようとする。 ・整理券から運賃を調べたり、両替したりして路線バスを利用する。					
児童生徒の年間目標 ・地域活動（商工会議所や事務委託作業、アンテナショップ運営など）や実習などの体験的な活動を通して、自分の得意分野や苦手分野を整理し、将来の仕事について考える。					
評価基準	評価・エピソードなど	関	思	技	知 観察方法
・アンテナショップの学習活動の自分の目標を考え、発表する。	・アンテナショップの学習活動の自分の目標を考え、発表する機会を設けた。「早く仕事を覚えて、作業販売の売り上げを上げたい」という目標を立てて発表できた。 ・授業中に「毎週行くのですか。」「ビフレだけでなく、イオンにも行くことがありますか。」などたくさん質問をしてきた。 （評価6月27日）		○		発表 観察
・アンテナショップで在庫確認、製品の補充、ちらし配り、販売活動の仕事を大まかに覚える。	・先輩たちが活動している写真を見たり、教師の話を聞いたり、ワークシートで仕事の流れを確認したりした。興味深く写真を見たり、話を聞いたりしている様子であった。「お客さんから聞かれたら、僕が商品の説明をしたいです」等意欲的な発言があった。 （評価6月29日）				○ 観察
・自宅・アンテナショップ間、アンテナショップ・学校間の路線バスでの移動の仕方を覚える。	・ワークシートを使って路線バス乗車場所、降車場所、運賃等を確認した。授業の最後に確認したところ、間違わずに答えることができた。 （評価6月29日）			○	○ 観察
	（評価 月 日）				

IV 訪問教育

学校への所属感の高まりを目指した二年間の取組 ～家庭への働きかけを通して～

教諭 宮原 圭子

1 児童の実態

- ・小学部2年女子。難治性てんかん、慢性呼吸器不全、末梢神経障害による両上肢機能両下肢機能の著しい障害
- ・気管支切開をしており、人工呼吸器を使用しているため、仰臥位で過ごしている。
- ・呼吸器の装着により日々の呼吸は安定したが、内臓（胃腸）の状態が乱れて入院することが増えている。
- ・週2回の訪問指導である。新入生としての入学式参加、今年度は学部集会への参加で2年間で計2回のスクーリングとなる。

【学習環境】

- ・自宅居間にある児童のベッド上で一日を過ごしている。常時母親が付き添い、呼吸器等医療機器の管理をしている。
- ・急変も多いため、指導時間は終始母親が同席している。

2 指導・支援目標及び指導計画

(1) ニーズと支援の整理

①本人の状態から

- 生命の維持、状態の安定が最優先である。
- 校内児童たちとの学校生活を共有（直接的、間接的）する。

②保護者との関係創りから

- 学校への所属感、一体感を強める

(2) 指導・支援計画

- 1年次 家庭への訪問指導体勢（学校）の理解推進
- 2年次 校内への関心の喚起

3 指導・支援の実際

(1) 1年次（保護者参加型の授業：家庭、本人との信頼関係作り）

指導内容	配慮事項（家族への支援として）
○入学式	・入学前の打ち合わせを丁寧に行う。式当日のタイムテーブル、途中退場のタイミング等確認することで安心感を強める。
○i-Padの絵本	・母親が得意とする手芸作品（プラバン、リボン等）を教材として映像に取りこみ使用することで、母親の気持ちと授業の一体感を図る。
○教科書（こくご）	・手芸作品の話しをきっかけにしながら、児童や母親の日常の生活や心情について話題を広げ、ニーズの円滑な聞き取りに繋げる。
○ハンドベル演奏	・教科書を使用することで、「学校生活のスタート」という意識を母親がと共有する。
	・複数のベルを使用することで、当日の児童の状態に合わせた音量や和音、メロディーが選べることを示し、母親の安心感に繋げる。
	・母親の得意とする音楽活動（担任との分担演奏）を取り入れることで、母親の穏やかな気配による児童の安心感を確保する。
○情報の提供と共有	・行政のサービスや医療についての話題の場を意図的に取り入れ、保護者の思いとの共有に繋げる。
	・学校からの配布物の説明と保護者への応答を丁寧に交わし、支援学校、訪問指導への理解を図っていく。入学当初は特に、緊急性や提出の必要が無い物はその旨を伝え、読み手の母親の負担感を減らす。

【児童の状態・変容】

- ・担任の歌や読みきかせの時間で、表情の動き（口元の笑み）が見られるようになった。
- ・母親と担任の談話の内容や演奏を聞いて、表情を歪めたりかすかな笑みを浮かべたりする変化が見られるようになってきた。

〔家庭の状態・変容〕

- ・学習刺激による児童の表情や状態の変化を知ること、次回の学習日への希望や要望をもつようになってきた。(年度後半から、週1日から2日の指導に増えた。)
- ・配布物について、緊急性のある物や母親の関心のある事項を精査して提供していくことで、次第に他の校内の通信や各種の案内についても関心をもつようになってきた。
- ・通知表での評価を交えた話題から発展し、家庭から医療面への働きかけの目標が出される。母親の積極的な働きかけで訪問リハビリの実現に至る。
- ・次年度は、年1回のスクーリングを目標にしたいとの母親からの要望が出る。

(2) 2年次(校内紹介中心の授業：他の児童生徒への関心の増幅)

指導内容	配慮事項(家庭への支援として)
○読み聞かせ ・立体絵本 ・校内児童の 写真絵本 映像	・学習刺激に心地よく児童が呼応する様子を母親と共有し、学習中の母子、担任との一体感を強めていく。 ・児童が、校内の児童たちの声や気配のする映像を好んでいることを母親と確認し、同世代の子供たちの存在の大切さを共有する。 ・教室壁面や、行事前後の校内掲示の様子(児童の間接的な参加の状態)をビデオ教材を通して伝えていく。
○情報の提供と共有	・地域医療に関する情報や他校のサービス利用状況等について、母親からの話題も引き出しながら話しをする機会を継続していく。 ・卒業生保護者との繋がりや場を話題にしていく。 ・学校行事参加には、家族だけの参加も可能で校内の様子を知ってもらうことも大切なことを伝えおく。

〔児童の状態・変容〕

- ・前年度の指導内容をベースにしながら2年生の学習を開始する。比較的安定した状態が続き、学部集会(7月誕生会)へのスクーリングとなる。
- ・冬季に入り、身体の状態は安定しない日が多くなっていった。(表情の歪みや身体のものけぞり等)

〔家庭の状態・変容〕

- ・校内において、常に児童の存在が集団内で保たれていることを知り、学校への関心も強くなっていった。
- ・同学年からの通信や収穫物のプレゼントを通して、母親から「〇〇さん、どうしている？」等の話題がでることが前年度よりも増えていった。
- ・全校体勢の動きの多い行事よりも、学部単位の授業が児童への負担の少ないことを提案する。無理な登校に繋がらぬよう、当日欠席も十分視野に入れることを伝え、7月学部集会(誕生会)参加となる。＊参加後の体調に特に変動は無く過ごした。
- ・自校学校行事(作業販売会、PTAバザー)に、児童の姉と母親が参加した。
- ・校内高等部生の進路先や社会参加活動への関心が強くなり、母親から内容について質問されることが増えていった。

4 指導を終えて

- 入学まで児童は容態の急変も多く、家族の、特に母親の心労は常に大きいと見受けられた。複数のサービス訪問を受けている現状に加えて、新たに開始になる学校の訪問指導は、家族の負担にならない配慮や提示の工夫が特に必要と考えられた。
- 我が子の状態は、他の児童生徒とかけ離れているとの思いから、当初学校そのものへの関心は薄かった。母親にとって一番身近な医療面の話題を中心に懇談することが、入学直後の母親の共感を強め、その後の校内への関心に繋がっていったと考える。1年目後半から段階を踏んで、教材の一部としても校内の児童生徒の様子を伝えていくことで、家族のスムーズな受け入れになっていったと考えられた。
- 児童にとって、家族(母親)の存在感とその醸し出す雰囲気安定は、児童の発達の基盤となる安心感を支えるものと考えられた。同席する家族(主に母親)も心地よさを感じながら過ごすことのできる、保護者参加型の授業構成は有効であった。
- 課題の多い地域医療への、様々な思いを持つ家庭であった。家庭からの行政や医療現場等への発信が、次に続いている同ケースの指標になっていくことを確認し合う。今後も機会を捉えながら、本家庭のニーズを地域の課題として発信していくことが大切であると考えた。

絵本を通してのコミュニケーション ～生徒の気持ちを考えながら～

教諭 谷藤 弘美

1 生徒の実態

- ・ 中学部 3 年女子 厚脳回症による著しい両下肢の障害、呼吸機能障害
- ・ 快・不快の表情、注視や追視、上半身の動き、発声などによる気持ちの表出や回数は体調によって変わる。目や頭を動かして話し手や教材を見る。「うう」などと発声することがある。
- ・ 季節の変わり目に体調を崩しやすく、1 日に 2、3 回てんかん発作がある。ほぼ仰臥位で過ごす。体調面も考慮すると身体を動かす活動は難しく、身体を動かす活動は控え、「見る、聞く」活動を中心として学習している。
- ・ 保護者のニーズ：体調が安定していてほしい。楽しいことを経験してほしい。

2 指導目標及び指導計画

(1) 指導目標

- ・ 絵本の絵や言葉の繰り返しに期待して読み聞かせを聞き、視線、発声、身体の動きなどで気持ちを表す。

(2) 指導計画

題材名「今日のおはなし なあに？」

学習内容	目 標
絵本や紙芝居の読み聞かせ ・ 仕掛け絵本 「鳥の世界」「ちょうちょのおにわ」 「にじいろのさかなのかくれんぼ」 ・ 紙芝居「きんぎょがにげた」	・ 絵本や紙芝居、ペープサートの絵に注目する。 ・ 教師の語り掛けを聞きながら、視線や表情、顔の向きなどを変える。 ・ 教師の予告に対し、注目して視線を送る。 ・ ページをめくる合図が分かり、視線や表情、身体を動かして気持ちを表す。

3 指導の実際

(1) 工夫した点

- ・ 生徒の体調面を考慮すると受動的な活動が多くなるが、その中でも生徒の能動的な活動を引き出したい。そこで、コミュニケーションの基となる認知「見る力」「聞く力」と「注意する力」にも着目し、生徒の様子を客観的に評価するために、コミュニケーションの発達ステップ「注意→期待・予測→意味理解→応答」を意識した指導を行う。
- ・ 注意を向ける時間を長くし、「注意の持続から期待反応」へつなげるよう、もともと好きな絵本や飛び出す仕掛け絵本等、生徒が興味を示しそうな題材を用い、教師の働き掛けに一連の流れを作る。

(2) 学習活動と生徒の様子

指導 月日	学習内容	手立て・留意点	生徒の様子（気持ちの推測）
10 月 6 日	・飛び出す仕掛け絵本の読み聞かせ。	・ページをめくる予告のために、金星のスティックを提示し、「ちちんぷいぷい、ちちんぷい」と言って絵本表紙をタッチしてページを開く。 ・生徒の反応を十分待って次のページを開く。	・最初は金星のスティックにも注目し、目で追っていた。（注目） ・白色が多いページの場合は、顔を左右に動かすことが多かった。（驚き） ・何回か繰り返すと星は見ず、直接本を見つめるようになった。（期待） ・黒っぽいページになると首を左右に振らなくなり、動きが少なくなった。（驚きから興味へ）

(3) 課題

- ・生徒の動きを注意する力の観点で分析すると、最初は驚き、次第に興味に変わったのではないかと考えられる。
- ・コミュにケーション発達のステップ「注意→期待・予測」までは読み取れた。次のステップ「意味理解→応答」につなげられるような指導の工夫が必要である。

(4) 改善した点と生徒の変容

指導 月日	改善した点	生徒の変容
12 月 8 日	・「注意→期待・予測」をねらい、絵本を読む前に予告として登場する魚のペープサートを提示して、目の前で動かす。 ・「意味理解→応答」の反応を引き出せるよう、絵本のページをめくる合図を分かりやすいよう「せーの」とする。ページをめくる度に「せーの」と言い、生徒の反応を待つ。	・眠そうにしていたが、魚のペープサートを見ると、目を開け、そちらを追って見るなど注目していた。 ・絵本の絵にも注目し、何回か繰り返すと、「せーの」のタイミングで口を突き出したり、右側の口角を上げたりする様子が見られた。

(5) 指導の評価方法

- ・指導記録を基に生徒の行動を分析する。
- ・ビデオ検証をして、客観的な意見を聞き、改善につなげる。



4 成果と課題

(1) 成果

- ・コミュニケーションの発達のステップを意識することにより指導方法を客観的に捉え、活動の中で生徒の気持ちを考えながら能動的な動きを引き出すことができたと思う。

(2) 課題

- ・限られた条件での学習活動となることが多いが、生徒の可能性を引き出すためにより専門的な知識を広げ、効果的な指導を続けていくことが大切であると感じた。

第3部 研修の記録

いなよう研修会

第1回 いなよう研修会（支援部主催）

学校・幼稚園・保育園等で必要な支援力を高める作業療法の視点 ～感覚統合を中心に～

【期日】平成28年8月3日（水） 【会場】湯沢雄勝広域交流センター

【講師】秋田県医療療育センター 作業療法士 渡辺 誠 氏

参加対象：県内特別支援学校 湯沢雄勝地区幼稚園・保育所 証学校 中学校 高等学校
行政機関 福祉施設職員

1 感覚統合療法定義

感覚情報の脳内処理過程の混乱で適応・学習・行動の問題を引き起こしている状態



基礎的感覚刺激を利用し適応反応を誘発し物事を効率良くしていく脳の基盤をつくること
原因を取り除くのではなく、統合能力を高めいくつかの症状を軽減すること

2 感覚統合療法での基礎感覚

人間の行動、姿勢＝運動、動作、態度をコントロールしている最も重要な感覚

(1) 種類とはたらき

①前庭系（前庭感覚）

はたらき	感覚の偏りから生じる状態
・筋肉の緊張状態、姿勢の保持をする ・眼球の動きを調整する ・跳躍運動（静止物体を観察する力） ・追従運動（運動対象を視線で追う。意図的に発生できない） ・固視（一点を凝視する時の眼球運動） ・協調的な運動を行う ・身体動作の加速度、回転、傾き、揺れを感じる ・適度な覚醒状態を保つ	・姿勢が保てない、じっとしてられない ・利き手（利き側）が確立しない ・読み書きに時間を要す ・字の形や図形がわからない ・友だちの動きが予測できない ・注意の切り替えが難しい ・動きがぎこちない、スポーツが苦手 ・過剰な努力、成功感の少なさ ・興奮と意欲、集中力の低下 ・睡眠、生活リズムが整にくい

②体性感覚系（触覚、固有受容覚）

はたらき	感覚の偏りから生じる状態
・どこにどんな物が触れているかの識別 ・危害から生体を保護する ・手、足がどうなっているのか判る	・鉛筆、箸をうまく使えない ・服をきれいに着た感覚が判らない ・逃避的、攻撃的になる ・集団が苦手、いつも不安 ・自分と外界（環境）の区別が曖昧 ・空間での自分の位置が判りにくい ・疲れやすい ・対象に合わせて物を操作できない

3 症状の背景理解と支援

【子どものすることには意味がある】

- 各々の感覚情報に基づき反応して行動を起こしている。
- 「問題行動」とは、特定の感覚情報に過剰に反応すること、または鈍麻なことである。
- 様々な感覚（鉛筆かじり、イス揺らし、髪の毛いじり等）を入力して自己安定を図っている。
- 情報の処理過程が不適切である時には、情報をコントロールすることで適切な反応を引き出すことができる。できる要素とできない要素を分析して、整理して提示をする。
- どんな感覚が、どんな時に行動にどう影響しているかを観察することで対応できることがある。教育や保育生活において社会的に受け入れられる形でその感覚を「補う」「避ける」「練習する」「利用する」こと。
- 対象児の理解・状況（場の理解）・人眼関係（コミュニケーション）・社会環境等を適切に把握すること。

あ と が き

本校では主体的に活動する力を育む授業実践～児童生徒の気づきや実感に基づいた学習評価を通して～の研究主題の下に今年度より 2 年計画で教育実践を推し進めています。

全職員による研究の目的は児童生徒が「主体的に活動する力」を育てるための有効な指導手立ての検証にあると考えます。その手立てとして観点別学習状況の評価に基づく評価規準と評価基準の設定と評価を取り上げました。

単元における評価規準を 4 観点から設定することで、活動に偏りや足りない部分がないかを指導者間で共有しながら指導にあたることができました。

さらに、児童生徒については評価基準を明確にしたことで「何をどれくらいしたらよいか」を児童生徒、指導者が共有できたのではないかと思います。

具体的に各学部の実情や指導の形態に応じた評価システムを設定して評価し、再実践につなげることができました。

例えば、小学部では「遊びの指導」を研究の場として設定し、授業の VTR 視聴とエピソード記録を活用し、中学部でも作業学習における VTR 視聴とカンファレンスを毎回授業後に行っています。

高等部では、進路学習の中で特に校外での実習に視点を置き、指導者間で情報を共有するツールとして「はたらくノート」を利用して、生徒・保護者・指導者間で情報を共有するためのツールとしては「振り返りカード」を用いています。

上記の評価システムとツールの活用によりいずれの学部にも児童生徒に好ましい変容が見られ授業改善としての初期のねらいは達成されたと思います。

来年度はより効率的な評価システムを構築しつつ指導者の負荷を軽減することが課題かとも思います。この後も本校教育活動に対しまして多方面からの御意見、御指導を仰ぎたいと思います。

おわりに、本校の研究推進のために授業研究会等々に御協力頂きました方々に心より感謝申し上げ実践の記録第 30 号を閉じることにします。

教 頭 高橋 貢

研 究 同 人

校長 小林 吉則

教頭 高橋 貢

事務長 高橋 修

<小学部>

鎌田 享
佐藤 貴子
後藤ゆり子
今川 美
福地 恵

宮原 圭子 (※)
伊藤 優子
赤川 陽美
高橋 健太

布目みち子
池部 和美
佐藤まゆ子
山田 裕子

<中学部>

谷口 和江
高田あづさ
水谷 智子
森田紗也子
佐藤 綾香

小番 俊和
室井 克典
岩井 宏樹
和泉かく子

川崎亜希子
谷藤 弘美 (※)
小野祐美子
大沼美和子

<高等部>

佐藤 茂樹
長谷山孝志
斎藤 健
青木 真一
築瀬 智佳
大沼 恵子
小田野 陵
佐々木 修

今野 洋美
鎌田 次美
栗林 陽子
伊藤 実紀
松井祐美子
佐々木美穂子
織田 基子
佐藤 美穂

伊藤 由紀
佐々木 顕
佐藤 幸徳
樋渡 峻
山本智栄子
高橋沙也香
安保 司

(※) 訪問教育担当

<非常勤職員>

佐藤 義昭
古関 文子

鈴木キヨ子
加藤健太郎

阿部 健悦
古関 久鈴

平成 28 年度 実践の記録「いなよう」第 30 集

発行年月日 平成 29 年 3 月

発 行 秋田県立稲川支援学校

〒012-0104 秋田県湯沢市駒形町字八面寺下谷地 3 3 番地の 2

TEL 0183-42-4424 FAX 0183-42-4874

ホームページアドレス <http://www.inakawa-s.akita-pref.ed.jp>

メールアドレス inakawa-s@akita-pref.ed.jp